THE
BIBLICAL STUDY.

Pro Christo et Patria.

基督の爲めの國の爲め

聖書之研究

第壹號

明治三十三年九月三十日

毎月一回發行

主幹 内村鑑三

本號目次

感話　回顧
宣言○主義と主我○恥辱と榮光○ガラス的人物○万全の策○最も大なる慈善○本誌の性質　黒田清隆伯逝く
○基督教と師弟の關係

講話　傳道
聖書の話（第一回）　田村直臣　夏期講談會
義人の祈　北信侵入記

說教　眞情
基督教の眞髓　悲む勿れ我が妹
怕ろしき世の中　天職論

雜感　實驗
東京獨立雜誌廢刊の眞因　飯泉生
解嘲之章　住谷逸人
誤解と疑察

研究　同情
創世記第一章第一節
馬可傳第一章一より九

明治三十三年九月二十九日印刷
明治三十三年九月三十日發行
編輯人　内村鑑三
發行人　山岸壬五
發行所　聖書研究社
東京府豐多摩郡淀橋町大字角筈百一番地

聖書之研究　第一號

明治三十三年九月三十日

我は福音を耻とせず、此福音はユダヤ人を始め、ギリシヤ人、總て信ずる者を救はんとの神の大能なればなり。

保羅

感話

宣言

法律はモーセに由りて傳はり恩寵と眞理はイエス、キリストに由て來れり（約

翰傳第一章十七節)

「聖書の研究」雜誌は「東京獨立雜誌」の後身なり、彼なる者は殺さんが爲めに起り、是なる者は活さんが爲めに生れたり、彼なる者は傷けんが爲めに劒を揮ひ、是なる者は癒さんが爲めに藥を投せんと欲す、責むるは彼の本分なりしが、慰むるは是の天職たらんと欲す、義は殺す者にして愛は活かす者なり、愛の宣傳が義の唱道に次ぐは正當の順序なり、「聖書之研究」雜誌は當さに此時に於て起るべきものなり。

* * * * * * *

聖書に曰く生命の水の河あり、其水澄く徹りて水晶の如し、神と羔(こひつじ)の寶坐より出づ、河の左右に生命の樹あり、其樹の葉は萬國の民を醫すべしと、(默示錄廿三章一二節)、余輩は天上天下此福音を除いて國民を醫す者の他にあるを知らず、此誌豈今日に於て出でざるべけんや。

* * * * * * *

國家的道德を說かずして個人的道德を說くものは聖書なり、觀內的(イントロスペクチーブ)道德を輕んじて遠望的(プロスペクチーブ)道德を奬勵するものは聖書なり、罪を責むると共に之を救すの實を供するものは聖書なり、正義に優て愛を貴重する者は聖書道德なり、聖書豈日本の今日

に於て說かざるべけんや

* * * * * * *

愛と云ひ福音と云ふ是れ勿論屈服を謂ふに非ず、宣敎師崇拜を指すに非ず、愛に恐怖なしと聖書は云へり、眞正に獨立たらんと欲せば、眞正に勇ましからんと欲せば、眞正に人の面を恐れずして勇進猛行せんと欲せば、吾人は先づ人と神とを愛せざるべからず、人を愛せざる勇氣、神を愛せざる獨立、是れ虛僞なり、讃むるに足らず、賴るに足らず。

主義と主我

イエス曰ひけるは若し我に從はんと欲ふ者は己を棄てゝ其十字架を負ひて我に從へ、(馬太傳第十六章廿四節)

世に所謂主義の人にして實は主我の人なる者多きは事實なり、彼等は自我の意見を遂行するをば稱して主義を貫徹するとは云ふなり、然れども吾人は主義と主我とに霄壤の別あるを認めざるべからず。

主義は我れ以外のものにして、自己とは何の關係なきものなり、否な、何の關係なき

のみならず、主義は主我の正反對にして前者の貫徹は後者の壓殺を要する者なり、自己の名譽を感ずるに敏く、その存在を認められざるを以て無上の恥辱となす者の如きは主義を實行し得ざる者なり。

恥辱と榮光

キリストは己を卑し、死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり、是故に神は甚しく彼を崇めて諸の名に超る名を之に予へ給へり(腓立比書二章八、九節)

榮光は恥辱の後に來る、人に嘲けられ、踐み附けられ、面前にて卑められ、惡人として、僞善者として、彼等の蔑視する所となりて、然る後に吾人に榮光は來るなり、然り、恥辱は榮光の先驅なり、開路者なり、春の夏に先立つが如く、月缺けて後に其滿るが如く、恥に遭ふて吾人に榮光の冠を戴くの希望あり、吾人は喜んで人の辱めを受くべきなり。

ガラス的人物

人の怒は神の義を行はず(雅各書第一章廿節)

世に亦ガラス的人物なる者あり、透明にして又剛毅、豪直を以て世に稱せらる、然れども彼れ破碎し易くして彼に接するは甚だ危險なり、吾人不幸にして少しく彼を傷くるあれば彼れ尖片を飛ばして吾人を傷くるや太だし、透明なるは愛すべし、然れども吾人は冷泉の清らかなるが如くならざるべからず、剛毅なるは貴むべし、然れども吾人は金剛石の如く五光を八方に放つものならざるべからず、激し易くして亦碎け易きものは低價なるガラスたるのみ。

萬全の策

神その翼を以て汝を庇ひ給はん、汝その翼の下に隱れん、その眞實は盾なり干なり(詩篇第九十一篇四節)

神の命を待てよ、然らば何事も行はれん、身を神に任かせよ、然らば凡ての力は汝に加へられん、汝は神の屬にして汝の事業は神の事業たらざるべからず、是故に汝に計畫なるものあるべからず、汝に焦心憂慮の要あるなし、神は彼れ自身にて活動する者、吾人は身を彼に獻ぐれば足れり、自から計り、自から行はんとして吾人は神よ

り離絶する者なり、而して斯く爲して偉大なる行爲の吾人の手に依て成らざるは勿論なり、吾人若し人に對し活動的たらんと欲せば神に對しては全然受動的たらざるへからず。

最も大なる慈善

愛は人の惡きを念はす(哥林多前書第十三章五節)

最も大なる慈善は人を呼ぶに善き名を以てするにあり、人を呼ぶに奸物を以てせよ、彼は奸物たらざるも或は竟に奸物たるに至らん、盜賊たらざるに盜賊の名を以てせよ、彼は遂に盜賊たるやも計られず、吾人は人を呼ぶに善き名を以てして彼の善性を喚起し、惡しき名を以てして彼の惡性を增長せしむ。

* * * * * *

神の神たるは人の善きを思ふて惡しきを思はざるにあり、惡魔の惡魔たるは人の惡しきのみを思ひ得て人の善きを思ひ得ざるにあり、神は人の善性を喚起奬勵して世を救ひ、惡魔は彼の惡性を刺激增長して終に之を亡す、救濟と云ひ、改良と云ひ、善の奬勵より他のものにあらず。

正義に二種あり、神の正義と人の正義と是なり、前者は愛の爲めの正義にして後者は正義の爲めの正義なり、前者は免さんが爲めに責め、後者は罰せんが爲めに責む其責むるや酷なる點に於ては一なりと雖も、其終る所は大に異なる、打て而して和ぐは神の正義なり、殺さずんは息まざるは人の正義なり、前者は永久の平和を來し後者は悲憤絶ゆる間なし。

* * * * * *

本誌の性質

是を「聖書之研究」と云ふ、然れども是れ必しも聖書の講義錄の類にあらず、余輩の目的は聖書を廣義的に解し、其傳ふる敎義を吾人今日の實際的生涯に適用し、以て基督敎の人生觀を我邦人の中に吹入せんとするにあり、余輩は勿論號を逐ふて其文字的註釋にも從事せんと欲す、然れども聖書を古典の類と見做し、是を解するに當らす觸はらずの方針を取るが如きは余輩の努めて爲さゝる所なるべし。

* * * * * *

聖書は過去の記錄なれども實は今日の書なり、死せる書の如くに見ゆれども實は

最も活ける書なり、是れに歴史あり、然れども是れ過去の出來事を傳へんが爲めにあらずして、人類の進歩歴史に於ける神の直接の行爲を示さんが爲めなり、是れに科學あり、然れとも是れヲチユアの配列進化を敎へんが爲めに非ずして、天と地と其中に存する總てのものに現はれたる神の聖旨を傳へんが爲めなり、其美文は文の爲めの文にあらずして、神の義と愛とを傳へんがための文なり、故に神の在さん限りは(而て宇宙は消え失するとも彼の在さゞる時はなきなり)聖書は人類の有する最も貴重なる書として存するなり、聖書は神に關する唯一の敎科書なり、之を識るは歴史と天然と文學との泉源に達する事なり。

基督敎と師弟の關係

汝等の師は一人なり、即ちキリストなり、汝等は皆兄弟なり(馬太傳第廿三章八節)

世に師弟の關係なるものあり、然れども基督敎に曾て是れあるなし、基督敎に於ては師は唯一なり、神なる基督即ち是のみ、他は皆な兄弟の關係にして師弟の關係に非ず、我等の傚はんと欲する者は唯キリストあるに止て、牧師、或は傳道師、或は其他

の敎師にあらず、此一事を知らずして世に基督敎を解し得ざる者多し。

* * * * * *

罪より救はれし者が未だ罪に沈む者を救はんと欲す、是れ傳道なり、救濟なり、我が救濟を唱ふるは我が完全無缺の人たるが故に非ずして、我れ病みて癒されしが故に醫癒の快を他人に頒たんと欲するのみ、儒者が世を誨えんとすると、佛者が之を濟度せんとすると、基督敎信徒が之を救はんとすると其根本的思想に於て偉大の差あり。

* * * * * *

我等は世を誨えんとする敎師に非ずして、世に我等の實驗を頒たんとする表白者なり、我等は人を我等自身に引かんとする者に非ずして我等に依て人を神に引き付けんと欲する者なり、故に我等は我等の缺點を摘指せらるゝを厭はず、そは我等の缺たるは返て神の完きを證し、我等の弱きは神の强きを確かむればなり、基督敎の他の宗敎に優るは其敎徒の缺點に依て其敎理を證明せらるゝにあり。

* * * * * *

基督敎徒とは赦されし罪人より他の者に非ず、清淨潔白の人、心に一點の疚しき處

のなき人、神の宥恕の必要を感せざる人は、或は世に稱する正義の人たるべけれども未だ基督信徒たる事能はざる者なり、未だ傷を負はざる者は基督の贖罪を解し得る者に非ず。

＊　＊　＊　＊　＊

人間の中に師として仰ぐべき人物を求めんとする者は必ず失望すべし、そは彼等の中に師として仰ぐべき理想的人物は一人も存在せざればなり、然れども同情者を求めんと欲して、我等の如くに惱む者、我等の如くに光明を探求する者を求めて、我等は彼に遭遇するに難からず、理想的人物は之を肉眼を以て視る事能はざる靈なる神に於てのみ求むべし、之を肉を被る人に求めて如何なる聖人君子も吾人を滿足するに足らず。

＊　＊　＊　＊　＊

傑物の出るを待たざれば何事をも爲し得ざるを非基督教國の狀態なりとす、ワシントンの如き、リンコルンの如き寧ろ普通的人物とも稱すべき人に依て大國家の建設並に改造を實行せし國民の心に東洋人の未た曾て知らざるの秘義なくんは非ず。

片々

○我を獰奸邪智の人なりと云ふ人あり、我或は然らむ或は然らざらむ、然れども是れ人の知る所にあらず、亦我自身の知る所にあらずして、之を知る者は我を造りし天の神なるのみ、故に我は誠實に神を信じ、我の善惡に關する裁判は單に之を彼の手に委すべきなり。

○惡魔は素と是れ小人なり、彼の眼光は事物の外形を視察するに止て其精神に及ばず、彼は機械的精密を貴んで生命的統一を解せず、彼に信仰なるもの一もなきが故に彼は疑懼を以て凡ての人と物とに對す、世を害する事最も多く、人生の快樂を減殺するに最も巧ある者は實に此惡魔の子供なる小人なりとす。

○人物の大小は彼の信任力の多寡に依て定まる、神の無限的に偉大なるは彼が人の善のみを思ひ得て惡を思ひ得ざるに依る、小人は疑ひ、偉人は信ず、欺かるゝは偉人の一特性なり、世を知ると稱して能く俗人の心腸を穿つ者の如きは、是れ彼れ自身が俗人たるの證にして、彼の如きは到底偉人の心事を解し得るものに非ず。

○世に勝つは快事たるを失はず、然れども世に負けるに優るの名譽あるなし、一躍して帝冠を頭に載きし那翁と、卑屈して十字架に釘けられし基督とは二者快を異

にして亦榮光を異にせり、

講話

聖書の話（第一回）

聖書の大體に就ては是まで幾度もお話し致しました、その世界唯一の書なる事、その國民を救ふの唯一の力なる事、その文學の莊美なる事、その人生觀の高貴なる事、等に就ては今更ら茲に申述べる必要はないと思ひます、文明人士にして聖書に暗いのは丁度支那人にして論語に暗く、日本人にして教育勅語を暗誦して居らないと同樣でありまして、聖書を知らずに世界文學を評するなどゝ何とも評しやうのない事であります。

故に私は茲では重に聖書の内容並に組立に就てお話し致さうと思ひます、その如何いふ風に編まれたる書である乎、その誰が書いた書である乎、その内に何う云ふ事が書いてある乎、その何うして研究すべきものである乎、是等の事に就て極く解り易くお話し致したく思ひます。

是を聖書と申しますと何んだか神樣の御眞筆にでも成りし書である樣に思ふ人もありましやうが、夫れは決して爾うではありません、是を聖書と申しますのは其中に神の聖旨が書いてあるからです、斯ふ申すのは何にも聖書以外には神の聖意が少しも書いてないと云ふのではありません、宇宙萬物は總て神の聖旨を表出したものでありますから正確に天然物の事柄を寫し出した書は確かに神の聖意を寫したものであると思ひます、ダルウィンの進化論の如きは實に其一つであると思ひます、孔子の教訓を集めたる論語、オルヅオスの詩集、カーライルの佛國革命史等も皆一種の福音書でありまして、善く其意味を玩味して其中に存する大能者の大御心を知る事の出來ない人はない筈です。

神の聖旨を人の手を以て寫したもの是が聖書であります、人の手に依て成りましたものでありますから、之に文字上の誤謬、歴史上の不明、科學上の缺點があるのは決して怪むには足りません、聖書を以て完全無缺、萬事萬物を識別する爲めの型典であると思ふ人は必ず此實き書に就て躓く者であります、神は科學上の眞理を聖書に於て示し給ひませんでした、歴史上の事實の如きも聖書に依てのみ分るものではありません、聖書を讀めば天然と人類とに關する事は何んでも分るものであ

ると思ふ人は未だ聖書の何たる乎を知らない人であります。

聖書は神の心を傳へた書であります。神は宇宙萬物を如何に具へ給ふ乎、神は人類間の出來事を如何に觀じ給ふ乎、是れ聖書か特別に我等に訓ふる事柄であります、夫れでありますから我等は聖書より科學上の事實を學ぶ事は出來ませんが、然し科學研究の精神は之を聖書より得なければなりません、歴史の事實に至ては之を埃及、巴比倫、亞述等の古跡舊記等に賴らなければなりませんが、然し歴史の何者たる乎、之を學ぶに當て我々は如何なる態度に出でねばならぬ乎、是を敎ゆる書は聖書を除いては他にないと思ひます、聖書は人の手に成つたものでありますから、矢張り不完全なる書でありますが、然し神の特別なる指導に依て此不完全の中に眞神の聖旨が最も明白に我々に傳へられました。

斯ふ申すも何うやら甚だ獨斷的の樣に聞えまして私が聖書を盲信するの餘りに出でた語の樣に思はれましようが、然し夫れは段々と此雜誌の號を重ぬるに從つて分る事であると思ひます、即ち聖書は天地と其中にある總てのものに就て記しまするが是は何にも博物學を授くる爲めではなくして、神の宇宙觀を傳ふる爲であります、又聖書は人の傳記並に國民の歴史を多く掲けまするが、是は其人の來歴

や、其國の出來事を永久に保存せんが爲めではなくして、神の人生觀を傳へん爲めてあります、聖書は他の哲學書や倫理書とは違ひ、事實に依て根本的眞理を傳ふる者であります、是れ其事實を掲ぐるに甚た詳い理由でありまして深く此事を究めない人が聖書を以て博物書か又は歴史の一種の樣に見做しまするのも全く是が爲めであります。

偖て基督敎の聖書と申しますれば、先づ之を舊約、新約の二部に分ちます、舊約は創世記を以て始まり、馬拉基の預言書を以て終り、其中に三十九書ありまして、聖書の殆んと五分の四を占めて居ます、殘り五分の一が新約聖書でありまして、是は馬太傳を以て始まり、約翰の默示錄を以て終り、其中に二十七書あります、故に聖書を研究せんと欲する者は先づ第一に聖書とは法華經や楞伽經と云ふか如き纒つたる一書でないと云ふ事を心に留めて置かねばなりません、聖書は書集でありまして一書ではありません、其内に歴史があります、乾燥無味の年代記があります、詩があります、歌があります、劇曲があります、預言と稱しまする悲憤慷慨の言があります、傳記があります、書翰があります、終りに默示錄と稱し、謎語の如き、諷刺文の如き一種異樣の文字があります、是を聖書と申せば何うやら嚴しい書のやうですが、然し

是を繙て見ると實に解し易い、睦み易い書である事が分ります、ソロモンの雅歌と申せば戀愛の最も高尚なるものを述べた戀歌であります、約百記と申せば人心の深奥に起る大問題を解かんと苦心煩悶せる人の實驗をドラマ的に綴つたものであります、創世記と申せば何うやら宇宙萬物の創始に就てのみ書かれた書のやうに思はれますが、然し其中にはアブラハムが其子イザクを神の祭壇の上に献げんとするやうな心膽を寒からしむる實話もありますれば、彼アブラハムの僕が井戸の傍にイザクの爲めに新婦を探がす佳話もあります、殊に預言者の言の如きは、怒るかと思へば泣き、泣くかと思へば歌ひ、歴史と詩歌と哲學とが相混和したるものゝやうに思はれて、之を讀んで我々は章の長きを忘れ、句の難きを思ひません、聖書を以て世に所謂聖人君子なる者の讀むべき書であると思ふのは大間違ひです、聖書は平民の書で、ありまして最も人情的の書であります、唯其太古の作なると異國の人の書かれたる者なると、殊に其日本譯の甚だ不完全なるとに依り、其意味を解するに甚だ困難なるが故に人々が多く之を手に附けない迄でありまして、若し我々が一度び其示さんとする眞意に達するを得ますれば、實は世に聖書ほど面白い書はないのであります。

斯う云ふ書でありますから其研究法も他の經典に於てしまするとは自づと異なります、我々は先づ第一に其外形を學ばねばなりません、此書の作られた土地柄や、並に其時代、其土地の風土、人情、物産、其時代の歴史、習慣、言語等、是等の大體を辨へねば其内に含まれ居る眞理の核子を探くる事は甚だ困難であります、眞理の探究と申せば理窟一法で出來る事と思ふ人が澤山あります、然し此處が聖書の供する眞理と他の書の供する者とが根本的に違ふ所であります、神は實在者でありますから彼は彼の聖旨を顯はすに實物と事實とを以てせらるゝより他の法を取られません、論理は動くものでありますが事實は萬世不易のものであります、神が彼の聖旨を傳へらるゝに或は岩を以てせられ、或は艸と木とを以てせられ、砂塵を揚ぐる旋風の中に顯はれ給ひ、湖面を亂す怒濤の上に歩み給ふは彼が事實の神であるの證據でありまして所謂天然を透ふして天然の神に達するとは聖書の神を探ぐる法でありまして、是れ亦實に近世の科學の精神であると思ひます。

夫れでありますから聖書を眞正に學ばふと思ふ人は先、聖書地理を以て始めなければなりません、地理は歴史の物質的基本である(Geography is the physical basis of History)と申しまするが基督教のやうな歴史的宗教を學ぶには地理學の智識は最も

必要であります、基督教は佛教や神道のやうな有りや無きや分らない空想國の事柄を論しません、エルサレムと申せば高天ヶ原とは違ひ、其經度も緯度も、海面よりの高度も、氣候も地質も能く分つた處であります、キリストの成長し給ひしナザレの村とは今でも存在する村でありまして、キリストの逍遙し給ひしならんと思はるゝ其周圍の小山も、彼が必ず摘み取り給ひしならんと思はるゝ其處に花咲く野草も能く分つた者であります、若し地理學なしの歴史は月の世界の政治論と同じ者でありまするならば地理學なしの聖書智識は金星或は木星の倫理學と稱ふても宜しいかも知れません、ユダ國を肥後の國や山城の國と同じやうの國と思ふて出來た宗教思想は飛んでもない事を唱へるものであります、

次に究むべき事は聖書博物學であります、レバノンの香柏と申しましても其れは何樣な木であるかゝ分らなければ之に關する聖書の記事は實に詰らないものであります、詩篇第百四篇十六節に「エホバの樹とその植たまへるレバノンの香柏とは飽足ぬべし」と書いてあつてもレバノンの香柏とは我邦の檜の類てあつて幹の周圍時には四十七尺に達し、高さ九十尺乃至百尺に達するものである事が分つて始めて之をエホバの樹と稱するの甚だ適稱であることが分るのであります、又馬

太傳の六章にありまする「ソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一に及ばさりき」と書いてある野の百合花とは我國の庭園に耕さるゝやうな大輪の花を結ぶ艸ではなくして多分毛茛科の植物の一種であつて我邦の秋牡丹の類であるだらふとの事を心に留めてキリストの此語を讀むと大分意味が面白く取れます、即ち野の百合花とは極く詰らない野草の一種でありまして我國の產を以て稱ひますれば桔梗か女郎花位のものを云ふのでありませう、即ち野にある極く普通の花でも其色香は大王ソロモンの裝にも優るとの事であります、天然の美を人の裝飾に比べて申されました最も適切な語であらふと思ひます。

其他教會を葡萄樹に譬へられましたキリストの御言葉でも彼國に於ける葡萄樹栽培法の一斑を知らなければ能くは分りません、羊とは如何なる動物である乎が能く分りませんければ、信者を羊に譬へられ、教師を牧者に譬へられしは何の理由か分りません、聖書博物學の智識は聖書記者のやうな天然物を非常に愛した人達の書いた書を研究致しまするには最も必要であります。

義人の祈

田村直臣

熱心に祈禱する人を見て、迷信者であると罵詈嘲弄するものは、祈禱の何物であるかを知らざる無智より出づる暴言です。

勿論無神論者には、祈禱は空うつ如きもので何のこたへもありませんから、祈禱する理由もなく、又祈禱する事もありますまい。然し祈禱をするものは、宇宙を主宰なし給ふ神の存在を信じ、一羽の雀の地に落つるも、偶然に落つるにあらずして神の御旨である、神の御許なくば毛髪一本だも其色を自由に變ずること能はず。生命を一時間否一分間たりとも延べ得る道のなきことを信じます。祈禱とは啻に其神に希願するのみを云ふのではありません、其御神と語ることです、其御神と交はることです。

親となりて最とも快樂を感ずるは、玉の如き愛らしき頑是なき我が子供等が親の膝下により來り、愛らしき顏と愛らしき唇もて片語に親に問ふたり答へたり、又親の首にしがりとかじりつき、暖かき滑なる頰をもて鬚ある石の如くかたき親の頰

にすりつけて、共に交はる其時です。嗚呼嬉しゝ、あゝ樂し。親子の熱き愛情は實にこの内にあります。

神と人間との關係は、親子の關係よりも猶ほ親密であります。密閉せる一室に入りて獨り滿腔の思を神に述べ、神の笑顏を拜する時が、人間の最も愉快な時です。キリストが屢々靜かな山に入りて祈を樂しみ玉ふたのもこの理由です。

義人の祈とは頑是なき小供の如き心を以て祈る祈禱です。一心不亂に岩をも貫く熱心を以て祈る祈禱です。ヤコブが「義人の篤き祈禱は力あるものなり」といひましたのは、即ち斯の如き祈禱を云ふのです。義人の一言の祈禱は、確に常人の千言万句に勝ります。

アブラハムや、エリヤや、クロンウエルや、ワシントンや、リンコルンや、ルーテルや、ジョン、ノックスや、彼等の祈禱が如何に世界を動かしたかは、歴史を讀むもの誰あつて疑ふものはありません。如何にも力あるは義人の祈禱です。

蘇格蘭の女王メリーの言に「我は恐ろしきもの一もなし、假令歐洲の大兵は來りて我を襲ふとも、何か恐るゝ事あらん。唯恐るゝ所の者はジョン、ノックスの熱心なる祈禱なり」と云ひました。如何に大膽なる惡虐なるメリーですら、此義人の祈禱をかく

まで恐れたのは故あるとです。ジョン、ノクッスは一日教師等と共に祈禱をし終り、忽ち叫んで「勝利は我手にあり」と云ひました。同席のものは誰ありて其意味を理解するとができませんでしたが、其時使者來りてメリーの死を報じました。

今日、我が日本は宗教上であれ、教育上であれ、政治上であれ、義人の篤き祈禱の必要な時です。我が愛國の士よ、「日本」の爲め、希くは涙に咽びて天に祈る所あれ。

說教

女子獨立學校に於ける最後の說教

基督教の眞髓（馬太傳第二十七章）

內村鑑三

基督教は非常に六ヶ敷い宗教であると多くの人は思ひます、是を能く解するには深い學問を要し、大學者でなければ到底此教を解し得ない事と思ふ人が澤山あります、勿論是は易さしい宗教ではありません、世界の全智識を悉くしても未た充分に解する事の出來ない宗教であり升、基督教の神學者の中には大哲學者もありました、大科學者もありました大文學者、大政治家もありました、然し今日まで彼等一人として基督教の奧義を悉く究めたと云ふ人はありません、基督教神學なる者は日本の青年や學者が之を蔑視するに關はらず、學問の中で最も六ヶ敷い者であります、基督教は其經典の比較的に少いが故に極く簡易なる宗教であるなどゝ云ふ人は、未だ其一斑をも窺ふた事のない人であると思ひます。

然しそれはさうとして、基督教の何たるか其最大教理の何たる乎は、之を知るに決して難くはありません、是は普通の人の誰も知り得る事でありまして、神學者でなければ知る事の出來ないなど云ふやうなものでは決してありません、それは大陽の輝くが如く明々白々なものでありまして、六歲の小兒も之を解し得れば鴻儒大家と仰がるゝ人でも之に敬服せざるを得ない者であります、基督教の眞髓を知るには別に神學校の教授を要しません、我々普通一般の平民でも充分に其何たる乎を解し得るものであります。

然らば基督教の眞髓とは何である乎と申しますれば、それは此馬太傳第二十七章に掲げてあり升基督の受けられし苦痛と此場合に處しての基督の行爲とより他ではありません、即ち人の子の中で最も清く最も正く其一生涯の事蹟の中に一點

の非難を加ふべき事のない人が、十字架の刑罰と稱する人間が曾て受けし刑罰の中で最も慘酷なる最も耻辱多き刑に處せられしと云ふ事てあります、極惡の人が極刑に處せらるゝは適當の事であると云はれませう、然るに極善の人が極刑に處せられしと聞いては我等何人も人生に就て大疑問を起さゞるを得ません、神の子にして人類の王たりしイエスキリストが受けし十字架の刑罰は事實として現はれたる悲劇の最も甚いものであつたと云はなければなりません

然るに是は事實でありました、一點の瑕瑾なきイエスキリストは人間の受けし最も慘酷なる刑罰に處せられました、然るに此人は此刑に處せられなから一の怨恨の念を懷きませんでした、彼は十字架に在て却て彼の敵人の爲めに祈りました『父よ彼等を赦し給へ、彼等は其爲す所を知らざるが故なり(路加傳第二十三章卅三節)』と、此忍耐、此寛容、此宥恕。是が基督敎の眞髓であらふと思ひます。

最も正しき人が最も苦しき刑罰を受けしとの事であります、然らば我等如き惡多き者、缺點多き者が多少の艱難辛苦に遭ふのは甚だ適當の事でありまして、我等は之が爲めに決して呟くべき者ではありません我が艱難をキリストの受けし艱難に比べますれば實に九牛の一毛、大海の一滴に過ぎません。我れキリストの艱難を

思ひ遣りて我は甚た幸福のものである事を了ります。

惡なき基督が如斯苦痛を受けられしを思ふて、惡ある我等が如何なる辛慘を嘗むるも決して恨むべきではありません。

基督は彼の敵を赦しました、彼を七度を七十倍する宥恕がありました、怨恨復讐の念は彼の弟子たる者の決して懷くべきものではありません、我等は基督の愛を以て我等に罪を犯せる者を總て赦すべきものであります、惡なき基督にして彼を十字架に釘けし者を宥されましたならば、況して我等惡ある者に於てをやです、我等は如何なる敵と雖も喜んで宥すべきであります、神の存在を知るも敵人を宥す事の出來ない者は基督信者ではありません、如何程基督敎の蘊奧を究め、其敎理に於て一も知らざる所なきに至るも心に長く怨恨の念を貯ふる者の如きは基督信者ではありません、神とは永久の宥恕でありまして基督敎とは此宥恕を敎へた宗敎であります、人の罪を宥さない者、赦し得ない者は基督信者ではありません。

怕ろしい世の中

爾曹は世に在ては患難を受けん、然れとも懼るゝ勿れ我既に世に勝てり(約翰

傳十六章卅三節)

世に何が怕ろしいと云て人世ほど怕ろしいものはありません、能く老へて御覽なさい、昨日の友人は今日の敵です、昨日までは膝を組んで心事を語りし人が今日は讐敵となつて我が惡を算へ立つるに至るのであります、世に何が怕ろしいとて斯んな怕い事はありません、人は亦他人は他人で兄弟は兄弟親戚は別物であると申しますけれども、それは必ずしもそうではありません、世に兄弟喧嘩なるものがあるばかりではありません、或る時は兄弟が相合して敵人と共に私共を攻め立つる事があります、預言者エレミヤの兄弟がアナトテの人達と合して彼を攻め立てましたのも此一例であります、戰爭なるものがあつて、人類が互に相屠り、死別なるものがあつて、最愛の父子夫婦も永遠に相分れねばならぬと思へば、人世に何んな好ひ事があつても、人世ほど怕ろしいものは他にありやう筈はありません。

然し是が人世であります、是を信任慈愛の世の中と見たのが我々の誤謬であつたのであります、人の信任なるものは朝の雲の如きものであります、是は東風の一吹と共に消え失するものであります、骨肉の慈愛すら利慾の魔鬼の襲ふ所となりますれば忽ちにして憎惡の牙を顯はすものであります、賴るべからざるは人の心

であります、是を思へば我等此世に在て實に淋しく感せざるを得ません

然しながら世が斯くも怕ろしい世であればこそ、神は無限の愛を以て之を愛し玉ひ、神の獨子を降し玉ひてまでも世を救はんと爲し玉ふのであります。故に私共は世の怕ろしいのを知れは知る程、神の愛すべきを悟るのであります、私共は今日よりは世の怕ろしいのを歎くべきではなくして、其斯の如き世なるが故に神が一層深く其愛を顯はし玉ひし事を感謝すべきであります、實に神を知らずして此世を渡るのは悲哀慘憺の極であります。

亦神を識て賴むべからざる人の心も稍〻賴むに足るやうになります、我れ神を信じて自身を信する益々篤くなると同時に亦他人を信することも益々深くなります、他人の亦我に對することも同じやうになりまして眞正の相互的信任なるものが起ります、人間の關係にして實は罪を赦されて神の子となりし者の如き深き篤き關係はないのであります、神を信じて始めて人世は稍々耐え易きものとなるのであります。

それでありますから我々は益々傳道の必要を感ずるのであります、我々は何も我々の弟子を作らんとて傳道を致しません、我々は神無しの人世の如何に怕ろしい

ものである乎を知りますから少したりとも其苦痛を減殺せんとて傳道に從事するのであります。

斯んな耐え難い世の中に生れ來まして愛なる神を知らない事は不幸の極であると思ひます、私共は餘りに世の辛さを感じますれば神に依て之を救はんとの念を起すのであります。

雜感

東京獨立雜誌廢刊の眞因

東京獨立雜誌が廢刊になつたればとて種々の臆說を立てる新聞記者や雜誌記者があつた、余輩は區々たる此小雜誌の廢刊が斯くも世間の評判の種となりしを見て實は意外千萬に感じた、余輩は此雜誌が斯くも廣く世間に知れ渡つて居つたとは自分でも知らなかつた、匿れたる者にして顯はれざるはなしとの事で、角筈村の隅から出て居つた斯雜誌も世間に多少の勢力を持つて居つた事は其廢刊を俟つて始めて知る事が出事た。

然し余輩の見且つ聞いた所では未た一人も其廢刊に至りし理由を明白に述べた者はないと思ふ、成程夫れには種々込入たる事情もあつたに相違ない、或は其廢刊に多少の惡感情の附隨して居つたに相違ない、然しながら區々たる私情が其原因でなかつた事は能く解かつた居る、雜誌の廢刊になるのは國の亡びるのと同じ事で是は彼人の罪、是人の罪と云ふのではなくして、之には超人爲的の理由があるのである、我等は物を判斷するに常に此觀念を以てせねばならない。

東京獨立雜誌は積極的眞理の不足の故を以て廢刊に歸したのである、勿論其記者は心に此種の眞理を蓄へない者ではなかつた、彼等は破壞を以て一種の積極的事業であると今でも信じて居る者である、然しながら此雜誌の起りし時が消極的眞理の必要の時であつた、即ち公平なる態度を以て社會の暗黑的半面に鐵槌を加へねばならぬ時であつた、其多少世に歡迎せられしは全く此時勢の必要に應じたからであつた、然しながら如何に日本國の社會なればとて之は立留りの社會ではない、日本國の社會でも多少は進步する、多少どころではない、世界廣しと雖も日本の社會ほど劇變する社會はない、日本に於ける三年は支那や英國に於ける三十年の變動を呈することがある、明治三十三年の日本は同三十年の日本とは大分違て來

た。

眞理は勿論時勢と共に變遷する者ではない、然れども其應用に至ては時と場合とに依て異なる者である、惡を責むる時もあれば善を奬勵する時もある、美術を奬勵すべきレナセンス時代もあれば、之を破壞すべき淸黨時代もあつた、同一の眞理が或は殺し、或は活かす事あるは何人も能く知つて居る所である。

東京獨立雜誌は世の暗黑時代に生れた雜誌であつた故に、少しく光明の世に顯はれ來りし時に至ては、其存在の理由はそれ丈け減少して來る譯である、勿論月や星は晝が來ると共に不用に成るべきものではない、夜は亦遠からずして來るものであれば東京獨立雜誌の必要も亦遠からずして來るものであると思ふ、然しながら梟ばかりが神の造り玉ひし鳥ではなくして鳥類の中には雲雀もあれば鶴もあるそして我等詩人たる者(雜誌記者は詩人なり)は夜は梟の眼を以て見、晝は雲雀の聲を以て囀るべき者と自から信するものである。

日本の社會は殆と失望の極に達して今は希望を要する時代となれり、其罪惡は摘指せられて全躰一點の眞生命を留めざる耶の感あるに至れり、日本の社會を憎みし余輩も今は深く之れを憐むに至れり、彼に對する余輩の感は哲人トイフエルスドロックの罪人に對する感あるに至れり。

他の眼を以て余は亦余の同胞を見るを得べし、無限の愛を以て、無限の憐憫を以て、憐むべき迷へる人類よ、汝も亦我の如く試みられ且鞭打たるゝ者ならずや、汝の王たると乞食たるとに關はらず、常に疲れ且つ重荷を負へる者ならずや、而して汝の有する唯一の休息の床は地下の墓場のみならずや、嗚呼我兄弟よ、我が兄第よ、何故に我は汝を我が懷に匿し、汝の眼より凡ての涙を拭ひ得ざる乎。

我の日本の社會を鞭しは之を殺さんが爲めにあらずして、之を活さんが爲めなりき、我の憤怒は我の愛心に基せしなり、我は元情夫が其愛人に於ける愛心を以て我が日本を愛せし者なり、而して我は今日より我が愛人を慰めんと欲する者なり、我が言ひ難きの艱難を忍び、友に誤解せられ、或は罵詈せられ、骨肉に迄で捨てられても再び東京獨立雜誌を今日に於て復活し能はざりしは我が衷にある愛心が憤怒の情に勝ちて、我をして再び夜叉たり閻魔たるを得ざらしめしに因るなり、今は我が衷に存する女性は男性を壓せり、我は今は愛し得て憎み得ざるに至れり、泣き得て怒り得ざるに至れり、我は今は我が民の傷を癒さゞれば息ひ能はざるに至れり。

是れ東京獨立雜誌廢刊の理由なり、而して是れ亦此『聖書之研究』雜誌の發刊の理由

なり、其之に伴ひし外面の出來事は細事のみ。

解嘲之章

住谷逸人

詩聖太白曾て山中俗人の問へるに答へて

問レ余何事棲碧山ニ　笑而不答心自閑
桃花流水窅然去　別有天地非人間

と謂へり、仙骨神情飄然として共に一世に超擧せるもの、眞に其不群なるを見る可し。賀知章の所謂謫仙の稱あるもの亦以て欽すべき哉。余は素より詩聖に非ず、安ぞ能く名什を物せん、余素より太白に非ず胡ぞ仙骨を有せん、然れとども詩心(A vein of Poetry)は人として有せざる無し、此詩心を以て此詩境即ち此美妙なる天地万有に臨む、豈一個の詩無からんや、若夫れカーライルの謂へりし如く眞に能く詩歌を讀まは余輩は皆詩人たる也「ダンテの地獄を一讀して、其慘狀に悚然たる想像」は則ちダンテの氣品にして、其程度の比例こそ低けれ又是れ同一の能力に非ずや。嗚呼

然り、誠に然り、『手を突いて歌申上ぐる蛙哉』蛙すら猶此の如し、況や烏をや、況や人をや、情海の波立つ所、心田の戰ぐ所、手の舞ひ足の踏む所、笑靨の窪み青筋の脹るゝ所皆悉く名篇大作、取て以て誦す可く、取て以て吟す可し、詩人の名稱豈二三子の私する所ならんや。余此頃良夜に乘じて明月を望んで清風に浴し、一日の熱汗を洗はんとして、人稀にして境閑かなる處ろ、一條の鐵棒を杖き、獨自ら欣然として莊子の所謂逍遙游を試みぬ偶々親友某氏あり、來て余の背を撫して曰く子も亦此良夜を樂むかと、由て俱に相携へて語る、契濶たる談讌心舊恩を念ひ、談は愈々佳境に進んで道は彌々幽靜也、高想妙思勃然として起り、論は詩人問題より一轉して生活問題に移れり。時に親友余に諗けて曰く世間君を識れる者亦甚だ少なしとせず、然れども其多くは余の如くならず、各其見を異にすと雖も要唯左の評言に過きず、君夫れ之を如何となすやと。余乃ち之に答へて解嘲の章一篇を作り、遙に漢代の楊雄を學んで客の嘲りに答ふ云爾、天下は廣し、人類も亦多し、帝州亦此の如き世に一個の迂拙漢あらば幸に首肯するや否、請ふ幸に煩を避けずば宜しく一粲の榮を賜へ、辭に曰く人は吾の貧なるを笑ふ、

然れとも蔬菜を食ひ、水を飲み、相ひ互に愛するは、肥へたる牛を食ひつゝ互に恨む

者に愈るが故に、吾は寧ろ其清を賴んで其貧を樂む者也。

人は吾の策なきを笑ふ、

然れども吾は世の才子策士が其餘りに策あるが爲めに、策に因て斃るゝを知るが故に、吾は寧ろ策なきを誇て惟エホバの旨のみに立たんとする也。

人は吾の利に拙なるを笑ふ、

然ども吾は暴利暴富に由て攫み來りし巨萬の富は猶かの疾風に吹き飛はさるゝ雲煙の如く、之を求むるの死なるか故に、吾は寧る其拙を擇んで世の顰に傚はさる也。

人は吾の智なきを笑ふ、

然れども吾は世の智者學者が、其俗智俗才に由て、益々其俗情を高むるの極、あたら天來の本能を痳痺し、崇高なる者、偉大なる者、深遠なる者、勇猛なる者、純潔なる者を鎖燼して、此世ながらの生き地獄に、獸慾の餓鬼と伍するを見るが故に、吾は寧ろ其愚に誇て、只大能の神を信じ、之を茲に識るを以總ての智慧に勝れりとなす也。

人は亦吾の寡默を咎めて其餘りに無愛相なるを笑ふ、

然れども吾は世の口賢しき利口便佞の徒が、富樓那に等しき辯舌を振つて彼に佞

し此を貶して變轉窮りなきの舌端は、世界を燃やす石火矢なるが故に、吾は寧ろ古諺(雄辯は銀也沈默は金也)を信じて、其言は兩刃の劒よりも利しと云へる、神命の下る迄は口を鉗して他を言はざる也。

語に曰く貪夫は財に徇ひ、烈士は名に徇ひ、誇者は權に死し、衆庶は生を憑むと、若し夫れ金殿や玉樓や、翠帳や、紅閨や、美衣、美食、美人、美姫や、勳位何等、爵位何階、黃金何鎰、軍馬何輛、所謂言ふ所として行はれさる無く、往く所として迎へられざるは無しと云へる、世の果報者に至ては、吾の欲する所に非ず又望む可き者に非ず、吾は寧ろ吾を賴んで、自由の智能、豪俠の精神、不撓不屈の忠膽義肝、他人の不義を宥す慈悲心克己、殉難、崇高、偉大、神と人と基督の爲め、幾千百の艱難を凌て沮喪せざる正義心を吾が生涯の道榜に印するを得れば則ち足る而已、世の紛々たる毀譽褒貶吾に於て何かあらん、嗚呼吾に於て何かあらん、歌に曰く

汝爲(タリ)汝我我(ハタリ)
由(テ)成敗(ニ)休(メヨ)判(スルチ)
死生唯神意(ノマヽ)
鴻毛(ト)與(ニ)泰山(ト)

誤解と疑察

誤解に誤解に誤解に誤解、國は國を誤解し、政府は政府を誤解し、父は子を誤解し、子は父を誤解し、兄弟相誤解し、友人相誤解し、此美はしき宇宙に棲息しながら誤解の暗霧の中に彷徨して憂愁の中に日月を送る、世にもし誤解てふものなかりせば此世は如何に好き世なるぞかし。

* * * * * *

疑察に疑察に疑察に疑察、己れの心を以て他人を測り、他の缺點を擧げて自己の潔白を裝はんと欲す、疑鬼は國家を亡し、社界を毒し、友人を離間し、家庭を紊亂し樂園をして地獄たらしむるの力を有す、軍隊恐るゝに足らず、疾病恐るゝに足らず、恐るべきは實に吾人の心に疑察念を釀す疑鬼なり、若し此世より全然疑鬼を排除するを得んか、其清淨は期して俟つべきなり、

* * * * * *

誤解は辨明を以て解くるものに非ず、疑察は疑察を以て應ずべきものに非ず、誤解は行爲を以てのみ解き得るもの、疑察は信任を以てのみ應すべきものなり、誤解と

疑察とを以て苦しむ日本の社會は勇敢なる行爲と確乎たる自信を要するや大なり。

* * * * * *

篤く神を信するが故に人の誤解する處となりて懼れず、人に善性の存するを信ずるが故に其惡を視て彼を捨てず、誤解を正すに正行を以てし、疑察に酬るに信任を以てす、神を信じ基督を信じて吾人は容易に誤解と疑察との天霧を排するを得るなり。

研究

創世記第一章

第一節　元始に神天地を創造り給へり。

儒教の總ては學而の一節に籠り居るとは余の曾て聞きし所なり、正當に之を解せは或は然るやも知れず、創世記は基督教聖書の最始の書にして其第一章第一節は其内に基督教の總てを含み居るやも知れず、其深淵量るべからざるの言なる事は

之を一讀して明かなり。

「元始」は何の始め乎、若し始めあれば終なかるべからず、是れ神の存在の始めにあらざるは明かなり、そは始ありて終ある者は神にして神にあらざればなり、神は造て造られざる者なり、生んで生れざる者なり、始あるものは神にあらず、「元始」の一言の神に關係なきは勿論なり。

然らは何の「元始」か、

勿論天地の始めなり、此廣大無邊の宇宙、是れ木の如く草の如く、人間の如く、蜉蝣の如き始ありて終りある者、即ち造られし者にして終には消ゆる者、即ち時限的のものなり既に「元始」と云ふ、是れ其曾て存在せざりし時ありしを證明するの言なり。

「神」、在て在る者、在さゝる處なきのみならず、在さゝりし又は在さゝらん時のなき者、靈にして又力、義にして又愛、言行一致して其言や行はれ、行はずしては言はざる者、唯一の完全者、萬物の造主、人間の父にして又其友、天と地と其内に在る總てのものは如斯き者の造り給ひしものなり。

神！彼は實に存在する者なる乎、彼か宇宙を造りしとの證據は何處にあるや、世に

無神論を唱ふ者多きに非ずや、誰か肉眼を以て神を見し者ぞある、神が宇宙を造りしと云ふ、妄誕も亦甚しからずやと、然れ共創世記の記者は如斯き無益なる問題には頓着せさりしなり、彼は子が父の在るを識りしが如くに神の在るを知れり、彼に取りては神の存在ほと確かなる事實はなかりしなり、宇宙は幻なるやも知れず、然れとも實の實は神なり、神の存在を疑はん乎、是れ存在其物を疑ふ事にして、神を信せずして實は確信なる者はなき筈なり、創世記々者は哲學者に非ず、又神學者にもあらさりしなり、彼は先つ神の存在を證據立て然る後に彼の記述に着手せさりしなり、彼は神の實在を自明的眞理（セルフエビデント）として受けたり、彼は或は迷信家なりしやも知れず、然れとも彼が今日世に稱する疑ふのみにして曾て信ぜざる哲學者の類にあらさりしは明かなり。

若し神の實在が自明的眞理なりとせは、何故に何人も直に之を信するに至らざる、有神論者の小數にして無神論者の多數なるは是れ何の故ぞと、是れ吾人の屢々耳にする質議なり。

人が神の實在を認め能はさるは彼の腦力に不足あるが爲めに非す、大學院に入て哲學を修め得る者が必しも神を認め得る者に非すして、正直に農業に從事する昔

時の豫言者アモスの如き者か最も能く神の事に就て識る者なり、神は推理(ロジック)にはあらさるなり、神は靈にして眞(まこと)なり、故に靈ならす眞ならさる者は如何に透明なる腦漿を有するにもせよ神を認むる事能はさるなり、利慾主義の哲學者はドコまでも利慾主義を主張す、余は未た哲學に由て主義を更へし人のありしを知らす、彼れ或は非常の困難に際會して、或は積善家の愛心に感じて彼の主義と哲學とを變更するに至りし事はあらん、然れとも單に推斷(Ratiocinaton)に依てのみ神は認めらるべき者に非す。

「愚かなる者は心の中に神なしと云へり、彼等は腐れたり、善を行ふ者なし」と(詩篇第十四篇一節)即ち聖書記者の說に依れば神の存在を信ぜざる者は愚かなる者腐れたる者なりとなり、言甚た獨斷的に似たり、然れとも能く其眞意を探りて、記者の此言の眞に事實に近きを知るべし、眞に正義にして、眞に眞面目なる者、眞に愛心深くして眞に無私なる者、眞に人の善を思ふて其惡を意はさる者にして、神の存在を聞いて之を否む者あるべからず。

「天地」現象的宇宙の總て、天と地と其內にある總ての者、星と日と月とは勿論、地と其內に在る總ての鑛物と植物と動物と、而して人と彼の中に宿る靈魂と、是れ總て神

の造りしものなりとなり。

「創造り給へり」(つくり)、希伯來語のBaraなり、創造の意なり、既に存在せるものを取て之を改造せりとの意にあらずして、天地萬物を創作せりとの意なり、工匠が木と石とを以て家を作るか如くにあらすして、美術家が粘土を取て像を作るが如きに非すして、彼の一言を以て、彼自身の中より神は天地を造り給へりとの意なり、Bara必しも無より有を作りしとの意にあらざるべし、そは既に神在て後の創造なれは、是れ絕對的の創始にはあらざるなり、然れとも神の創造の人のそれと異なる點は人は僅かに比較的にのみ創作的なるに止て絕對的に然る能はさるに比して、神は何人にも何物にも賴ることなく、自身、彼れ自身より總てのものを作り給ふなり、世に絕對的に獨立なるものは神のみにして、亦絕對的創作者たり得る者は彼のみ、神は一の宇宙を改造して他の宇宙を作り給はさりしなり、彼は亦彼れ以外に存在する者を取て彼の宇宙を作り給はざりしなり、又天地は神の造りしものなり、神自身又は神の一部分にはあらさるなり、神の作りし者なるか故に神聖なるは勿論なれとも之を神なりとは云ふを得す、神聖なるとと神とを混同する者は物と物の性質とを混同する者にして如斯き者は反て神を瀆す者なり、偶像崇拜の非理は此に存す。

「元始に神天地を造り給へり」、此一節に基督信者の宇宙觀と人生觀の一部とあり、宇宙大なりと雖とも神に造られしもの、故に神か之を變更し、又は改造し、又或る場合に於ては其運行を中止し又は早め得るは勿論なり、こゝに於てか奇跡(ミラクル)なるものゝ信し難き者に非るは明白となるなり、神に造くられたる宇宙が神の支配を受くるは當然にして、彼が一言の下に其波を靜め、其地球の回轉を一時中止したればとて決して怪しむに足らざるなり、基督敎は宇宙萬能說を取らず、基督敎は神は宇宙の上に立つ者なるを知るが故に其信者は神に依賴して宇宙の奴隷たらざるを得るなり、既に神の造りし宇宙、然れば是れ我父の園にして、我其中に住して恐怖ある可らず、我れ吾國を去て他國に行かんか、神必す其所にあり、我此地球を去て木星又は水星に至らんか、彼必す其處にあり、彼はオライオン星にあり、プライアデス星にあり、而して遠く此宇宙を離れ他の宇宙に至るも我か父は亦其處にあり、神と和し、神の子となりて、宇宙は美はしき樂園となり、我れ其所に彼の偉業を讃へ、口に彼の榮光を唱へながら死の睡眠に就く時は彼は再ひ彼の聖手に我を受けて、新らしき天地新らしきエルサレムに我は永久に彼の聖名を讃ふるに至らむ。

回顧

黑田清隆伯逝く

内村鑑三

黑田清隆伯逝く、余に深き感動なき能はず

余は歲十七にして伯が曾て開拓使長官たりし頃、伯が設立せし札幌農學校に入りし者なり、嗚呼伯なかりせば農學校はなかりしなり、農學校なかりせば余は札幌に行かざりしなり、札幌に行かざりしならば余は聖書と基督敎とに接せざりしなり若し之に接し之を信ぜざりしならば余の今日の不幸と幸福とはなかりしならん伯の生涯と余のそれとの間には深き關係ありて存す。

伯、農學校を札幌に移すや、米國マッサチユーセット洲々立農學校長W.S.クラーク氏を聘して其臨時校長となす、二雄東京に於て相會し、濠船玄武丸に同乘して北航す、船中談直ちに學生の德育問題に入る、クラーク氏は彼の確信を述べて曰く「余の知る處を以てすれば彼等に聖書を敎ゆるの外彼等を德化するの途あるなし」と、長官襟を正ふして曰く「是れ余の贊同する能はざる所なり、我國に儒敎あり、神道あり

何ぞ必ずしも外教を用ゆるの要あらん、君、余の學生に教ゆるに倫理を授くるも可なり、然れども彼等に耶蘇教の聖書を教ゆるに至ては余は堅く之を謝絶せざる得ず」と、クラーク氏は答へて曰く「若し然らば余は道德を教へざるのみ、余の道德は凡て聖書の中に存す、聖書を離れて余は道德を教ゆる能はず」と、伯は日本陸軍の中將クラーク氏は米國陸軍の大佐なり、二雄其說を固持して相對す、其間豈に寬容の在べけんや。

船は尻矢崎を周行して函館港に入りぬ、而して將軍大佐共に其說を變へず、船は再び港を出で、龍飛、白神を左右に見て中の潮の荒波を蹴立てつゝ進みぬ、而して米の大佐は日の中將に此問題に就ては一歩も讓らざりき、船は終に小樽港に入りぬ、而してクラーク氏は少しも其說を曲ぐるの樣を示さず、兩雄共に札幌に入りぬ、而して新設農學校の德教問題は未決問題として存しぬ、然れども開校の時期は迫りぬ、而して二者孰れか一歩を讓らざるべからず、伯、クラーク氏に面して曰く君終に君の意を曲げず、余は今如何ともする能はず、余は君に告げんと欲す、余は君に聖書を學生に授くるの許可を與へんと欲すと、唯君願くは余り公然に之を爲す勿れ」と、大佐は答へて曰く「君に謝す、余は明日より倫理を余の學生に講ずべし」と、是れ北海道

札幌に於ける基督教の濫觴なりとす。

其翌年初年級廿餘名悉く洗禮を在函館宣教師MCハリス氏より受け其翌々年、即ち明治十一年六月二日、余等同級六名は札幌市創成川の東岸にありし外國教師館内の一室に於て同じ宣教師より父と子と聖靈との聖名に依て洗禮を受けたり。

嗚呼黑田伯とクラーク氏とハリス氏、彼等三個の記憶すべき名に依て余は此教を信ずるを得たり、余は個人的に伯を知る甚だ尠し、唯余の札幌農學校卒業證書に伯の名と印とを存すると、偶々札幌市街人行少き處に伯の偉貌を拜し、伯は馬上に烏を狙ひ打ち給ひし頃、余は歩行して鷸と啄木鳥との跡を逐ひき、伯は勿論終生宗教の人に非ざりき、余は亦た伯に迎へらるゝが如き性質の者にあらざれば伯は余の名さへも覺へざりしならんと信ず。

クラーク氏を余は彼の米國アマストのホームに於て三四回訪問せり、彼は余に語るに南北戰爭の事を以てし、グランド將軍を激賞し又談幾度か彼自身の事業に及びき、而して日本札幌に於ける彼の短生涯を語る毎に彼は未だ曾て深き感動を示さざるはなかりき、彼は余がアマスト在留中此世を去れり、而して彼の牧師なりしチツキンソンと云へる人は余に直接語て曰へり、「余はクラーク氏の死の床に臨め

り、而して彼は余に幾度か告げて曰く「余の生涯の事業にして一として誇るに足るべきものあるなし、唯日本札幌に於ける八ヶ月間の基督教傳播こそ余が今日死に就かんとする際余を慰むるに足るの唯一の事業なれと、君願くは此事を君の本國に傳へよ」と、此英雄死に臨んで戰勝を思はず、科學的發明を顧すして僅に八ヶ月間に渉りし聖書智識の傳播を思ふて慰むる所あり、兩雄今は此世の人に非ず、然れども二者の余の心靈に對し如何に關係深きを思ふて余は感慨に堪ゆる能はず、

逝けよ、偉人よ、恩人よ、余等今尚ほ今世に存して余等の戰爭を繼續せんと欲す世に誤解され、友に欺むかれ、辱められ、貧し、鈍し、泣き、死と墓とを思ひ乍らも余等は尚ほ汝等が余等に傳へし此眞理を一人たりとも多くの人に傳へんと欲す、余は幾回となく聖書を繙きし事を歎ずる者なり、思へらく若し此大眞理に接せざりしならば余に此大苦悶なかりしならんと、然れとも日光は常に此暗雲を排して余に大歡喜を供するなり、天よりの聲あり曰く「若し汝にして聖書に接せざりしならば汝は凡人たりしなり、汝はダンテを解せざりしなり、汝はオルヅオスを友とするに至らざりしなり、汝の苦痛は淺かりしと共に汝の喜樂も甚薄かりしなり、汝は敵を有せざりしならん、然れども汝は萬國の民を友とするには至らざりしならん、喜べよ、慰めよ、汝は天の特別の恩寵に與かりし者なり」と。

想ひ見る、明治九年秋九月濠船玄武丸が兩雄を載せて北海に向て品川灣を發錨せし時、是れ實に余の永遠の運命の定まりし時にてありき、其時已にクラーク氏の行李中に五十冊の英譯聖書は氏の學生中に分配されんが爲に收められきと聞く、而して其一冊は確かに天國の道を余に傳へしもの、余は何を以てクラーク氏の此好意に酬ゆべけんや。

伯は逝けり、世は伯の生前の行爲を云々するならん、伯の完全の人にあらざりしは余の青年時代に屢次聞きし所なりき、然れども驚くべき神の攝理は伯を透して天の福音を數多の人に傳へしめたり、讀者幸に伯の爲めに一滴の涙を惜む勿れ。

傳道

夏期講談會

內村生

何が偖置き、一社で計畫した大會合を一人で引受けた事だから溜らない、既に申込〆切期限なる七月十日までに百十有餘名の申込あり、其一割は缺席するとしても九十名の友軍は押し寄せ來り玉ふ事と思へば會主の心配は一通りではなかつた、所が捨てる神あれば援ける神もあるもので、會主の此艱難を聞くや彼の友人は東西南北より馳せ附け呉れたり、先づ第一に彼の同窓の友なる大島正健氏は萬事を打捨て奈良の舊都より馳せ上り、京都なる便利堂よりは其家人の一人を送り、信州上田なる同志會員は其目下切要なる業を捨てゝ援助に來らる、東京に在ては友人松村介石氏留岡幸助氏は滿腔の同情を以て此會の成立を助けられ、阪入嚴氏は救世軍より入り來て雜務を擔當せられ、忽にして混雜は變して整頓となり、多數の來客を遇する途は備はれり。

斯くて七月廿四日に至れば先登第一として下野の國の住人其都賀の郡穗積村なる柴山由太氏入來る、彼の風采を見上れば學生に非す、商人に非ず、手に雨傘一本を提げ、紛ふべきもなき田圃の子なり、彼が獨立雜誌の愛讀者なりし乎と思へば役員一同は奇異の感に打たれぬ、余輩は彼を女子獨立學校內の指定の室に彼を送り込みぬ。

次に玄關に顯はれ來りしは丹波國何鹿郡志賀鄕村の住人志賀眞太郎氏なりき、昔時酒天童子が巢を作りしと云ふ大江山の近邊より態々此會に列せんが爲め山川三百餘里を遠しとせずして來られし者、彼れ身に一つの西洋的修飾を附けず、只見る氏の双眼に一種云ふべからざるの歡喜と滿足とを浮べて我等基督教を信ずる茲に二十有

餘年、爾も憂鬱に沈み易き者をして漸愧の念に堪へざらしめたり、氏は曾て昨年一度余輩を訪問せられし者、余輩一ヶ年の精神的修養が氏をして殆んと理想に近き農聖たらしめしを發見せり。

伊豆國伊東よりは飯島忠造鈴木德太郎氏來り、其賀茂郡三阪村よりは岡村誠之氏來り、或は農を業とし、漁を職とし、醫に志す者、至誠は其滿面に溢れ、余輩をして益々此會に於ける余輩の責任の重きを感ぜしめたり。

信州は日本帝國の脊髓にして又此稀有の會合の眞髓なりき、其上田よりは淺井敬吾氏は氏の國手たるの職を省みず、其數十名の患者を他に托し、來て此會に止まること六日、其瀧澤一郎氏は少壯の身を以て蠶種改良に從事する者、亦吾人の中に在て活動の一中心點なりき、其飯田よりは小林洋吉氏は此會合に臨まんが爲めに特に今年の夏蠶を半減せられ、其妹君と共に來て十有餘日を吾人の中に送られ、其南安曇郡東穗高村なる井口喜源治、荻原守衞氏は同腹の兄弟の如き愛情を以て一日も缺くことなく此會に臨まれ、其上伊那郡は柴祖一氏を送り、小諸と飯田とは尙ほ一人つゞを送る筈なりしも事故ありて此事なかりしは殘念の至りなりき。

飛彈は長谷川勇、渡邊三藏、柚原三郎の三氏を送り、以てかの山國に於ける獨立雜誌の多少の感化力を表せられたり、曰く飛州に此誌に依て生涯を一變せし者尠なからずと、三氏共に實務の人、一は國に歸り、一は哲學館に入り、一は余輩と留まりて聖經を究めんとす。

紀伊は梅北雪平氏を送れり、見る精神有て肉體なきか如きの士、七十有餘の村童を相手に邦家の精神的改造を畫す、曰く世を見れば悲憤に堪えざる事多しと雖も、亦自我を省みれは全身繼縷たるのみと、以て氏の謙と遜とを知るに足る、南海の精神界に亦希望多し。

山陽道は德田浩司、妹尾福松、有元新太郎、森本慶三の四氏を以て代表されたり、中國人士にして爾も表裏の別を留めず、德田君の圓滿なる、妹尾君の氣骨稜々たる、殊に美作人士の信濃飛

彈の人士に似て海無し國の性を帶ひ、超世俗的欲望を懷くに至ては强く余輩の尊敬を引けり、陰陽兩道の革新或は此國より防まらざるを得ん乎。

長崎より池田福司氏は來れり、氏は造船を以て業とせらるゝ者、爾も深く意を心界の事に注ぎ、大舶を造て稠密せる我邦人を汎く洋面に散布するの策を講せらるゝと思へば、亦個人の心裏に天國を扶殖するの要を說かる、余輩は傳道師の宗敎を語るを聞き厭きしも造船師の天國の事を談るを聞て新たに福音を耳にするの感ありき。下野の靑木義雄氏は肥料商なり、沈默にして席上曾て一語を吐かず、余輩時には氏の吾人の中に在りしや否を疑へり、爾も氏が實際的に氏の熱情を發表せらるゝの事實に至ては余輩をして感奮せしむる事多かりき、西瑞人の諺に曰く「雄辯若し銀ならば沈默は金ならん」と、余輩辯士の位置に立ちし者は靑木君の前に愧ぢたり。

新田勝寛氏は磐城國白石より來らる、氏は知命に近き齡を以て炎天を冒して遠路此會に臨まる、夏期學校とし云へば世人必す靑年の會合と見做す今日、吾人の中に此年長者を見るを得て吾人の此會合の通常の夏期學校にあらざるを知れり、余輩は氏に先生と仰かるゝ者にあらざるを自覺し、返て總ての點に於て氏の後進者たるを認めたり。

駒井權之助氏は京都洛北なる氏の幽居より來らる、氏は余輩の大阪時代よりの友人なり、能く英文學に通し、多くの友人を英米人の中に有し、靜肅にして又勤勉、獨立雜誌上の華山白駒は彼なり、學博くして情熱きこと氏の如き者こそ眞に世を救ふの力たるなれ。

小川達氏は水戸より、佐藤武雄氏は浦和より公務の餘暇を以て此會に臨まる、人は云ふ余輩に今日の日本官吏を迎ふるの寬容なしと、然れども是れ余輩を知らざるの言、稅吏たりしマタイを擧けて十二弟子の一人となせしキリスト、地方長官たりしテヨピロに使徒行傳を奉りしルカの迹を踐まんとする者に絕對的に公吏を斥くるの理由なし、余輩は二氏に於て誠實謙遜なる官

吏の好模範を認め、二氏の來會に依て余輩の意を强めし事大なりき。

山內君と倉橋君と西澤君とは好靑年の三幅對、曰ふ「後世への最大遺物」は三君をして此會に引きしものなりと。其他立敎中學、明治學院、高等商業、高等師範、何れも、代表せられさるはなかりき、越後あり、相模あり、日向あり、筑後あり、余輩は茲に一々諸氏に關する余輩の觀察を述ぶる能はさるを遺憾とす。

賄係は會主夫人其衝に當り、彼女を助くるに上田なる同志の姉妹あり、之に加ふるに近隣の老媼を以てし、少くも四十人前、多き時は六十人前、或は二回に或は三回に諸氏の廣濶なる胃袋は充たされぬ、我等白米を盡す事六俵、魚を平ぐること十七圓餘、牛肉二十斤、茄子と南蕃瓜とは無數、五十有餘の同志相共に會食する事なれは、我等の食慾は頓に增進し、麁飯に山海の珍味に勝る高味ありて、我等は十日間一回も減食の要を感せざりき、殊に此會合に於て注目すべきは樹下の饅頭會なりき、角筈村は遠く市外に在りて、都市の甘味の其附近に鬻かるゝなし、唯信長時代より傳はりしと云ふ麥粉と小豆粉とを以て製せられし此好物の盛に近隣に鬻かるゝあれば我等一日三食を以て尙ほ不足を感ずる時は淸談高話の間に各金貳十厘を投じて幾回となく此中古的甘味を喫したり、共に食はざれば眞正の親睦なしとの余輩の格言(モット)にして眞ならば我等が樹下の饅頭會は講師のクダラヌ說敎演說に勝りて會員相互の心情を結び附けるが爲めに幾倍か力强かりしならむ。

夏の十日

黑木耕一

大磯逗子のみが愛すべき夏にして、東都の夏獨り愛すべからざるか。自然は思ふが儘の颱風急雨を飛ばし、雷電を放ち、人は相變らず玉の汗を流す。白雨炎熱を拂て池畔頗る涼を覺え、男女老弱白袴の衣を着けて店頭白氷を嚙み、富める者驕る者眠る者は金を攫んで去れども、貧に泣くの民は、白晝奄々として車を曳く。東京の艶陽に厭ふべき所あり、東京の夏に眞詩人の値

を拂ふべき無邪氣の好景あるに非ずや。

試業は終れり、休暇は來れり、幾千の學生は謳歌して歸れり、幾百の紳士は都塵を厭うて行けり、光陰瞥過の火車は忽ちに七月二十四日を乘せて走れり。而して其翌日より東京の西端角筈村女子獨立學校內綠陰重々の處に內村氏の夏期講談會は開かれ、八十有餘の士は嬉々として八方より入り來れり。然れども、講談其者が角筈の講談會には非ざりき。若し世に名は實よりも大なるものなりとせば、角筈講談會の如きは、恐くは其一に算ふべきものならん。

講談會、講習會、夏期學校の名稱は、單に、其學科の睡眠的聽聞を意味す。角筈の集合は、少くとも日本諸國同志の懇親會なりしなり。而して特に注意すべきは、寄宿の會員數十名が內村、大島の兩先生を大統領と仰ぎ、期せずして一新社會を作爲したりし事なり。故に我輩は、之を講談會と呼びて其內容、眞味を解する能はず。之を懇親會と呼び、而して更に、之を新社會、新天地と呼んで大に其眞味、內容を解することを得るなり。

短簡に、焉れを一新國と見做したる予輩の感懷を據べしめよ。諸國の好青年によりて組織せられし角筈の新國は、極めて單純なるものなりき。唯一の命令規約は眞正のゼントルマンたるを期せよと云ふの件にして、別に繁縟の法文の存するなく、身邊を飾る位階勳章てふものゝ具はれることなかりき。九州の青年は、關東の男と胸襟を披き、中國の士は南海の人と笑を以て相對ひぬ。渠れ誠意を以て我を向へ、我も亦邪推を擲て彼を看たり。而して同志は及ばん限り自由の行動と、自由の生活を營みたりき。日本國洵に好青年を有せざるには非ず、彼等は多數の墮落書生の爲に蔽ひかくされつゝあり。一人の大統領が粗服を着けて、眞黑の毛脛を露はし、橫隔膜以下の笑を以て了れる快談を續くれば、今一人の大統領は、團扇片手に徐行して笑ひながら我等に春風の習々たるを吹かしぬ。我は心に未來の天國を憶うて、毘沙門祭る神樂坂を忘れたりき。我は此の小數の友と和して、多數の人

間と離れたりき。夜間の座談ありて鈍き我の腦漿を固め、樹下の吟咏を聽いて汚き我の双耳を洗ひ、二錢五厘の親睦會、二錢づゝの饅頭食ひありて貧を我の胃の腑に謝し、大島先生の相樸直傳を授かりて、我は昔しの子供に反りぬ。我等は怒ること少くして夥く笑ひ、悲しむと少くして喜ぶこと夥しく、身躰の各機關は慄しく運轉せられて、十日間の生活は少くとも我に數年の餘命を增し、堪へ難き蒸熱は大なる慰藉と大なる教訓とに因りて抑へられき。

而して此第一次の集會に於て新國民は笑多き內村大統領、愛深き內村大統領を觀たり。更に又慕ふべく、驚くべき大島先生を發見せり。大島先生に關しては、予は茲に特に數行を費やして、未知の讀者諸君に紹介し置くの要ありと信ず。

數四の著書により、又國民之友、獨立雜誌等の論文により、諸君の知り給ふ大島正健先生は、同じく札幌農學校に七ッ道具を背負ひ給ひし人にして、目下奈良の某私立中學を督し給へり。國漢のことは其餘力に成るものにして、敢て其本職といふに非ず。音韻學の專賣者と雜誌上に見せかけ給ふは先生の狡猾手段にして、予輩は先生の頭を叩いて、教育、宗教、文學の各談話を面白く聽聞することを得るなり。

小なる予れは、大なる先生を批評すること能はず。然れども先生は建全なる基督教信者なり、妄りに人と爭はざるの君子なり、名を貪らざるの學者なり。年齒內村民に長ずること二歲、其細やかなる躰格と、愛嬌ある顏貌は寫眞に印し又精神に刻せられて、今尙予輩の眼中に映ぜり。長たらしき躰格と鋭き眼眸とを有する直截的の內村先生が此大島先生と二十年來かはらぬ朋輩なりときゝては、予輩は今更の如く、天の配劑の妙なるに驚かずんばあらず。

不心得なる人たちよ、僅に數十の人口を有して、十日間の生命を東都の一片隅に保ちたる小集會なりしと嘲る勿れ。大なりと雖殘りの全日本は小なり、小なりと雖此新國は大なり。此一人は實に賴母しき一人にして、此一日は實に價値多き一日なりしなり。神に賴りて、社會に賴らざ

夏の十日

るの士こゝに在り。確たる人生觀を有するの士此處に在り。貧を憂へず、富に屈せざるの士此處に在り。渠等に理想あり、勇氣あり、而して十日間の精神的歴史は渠等が今後の行動如何によりては、決して天地と共に永久消滅すること無きを信ず。

小事は完全を作る、而して完全は小事にあらず。數十の人間を有せし天國は、必ずより大なる天國を作らん。十日間なりし天國は必ずより長き天國を作らん。サボナローラは一人なりき、ルーテルは一人なりき、ペスタロッツは一人なりき。然れども彼れの一人は妓樓に醉ふの一人に非ずして、實に眞面目なる一人なりき。一國家なりき。一宇宙なりき。

嗚呼東都の夏は予一殊に孤獨なる予に取りては未だ經驗せざる快き生活なりき。地の利は得ずとするも、人和を得たる角筈講談會は萬歳なりき。知らず地の利を得たる逗子、大磯の遊將浴卒は如今何等の和かき夢をや結ぶ。

夏期講談會日記

書記 黒木耕一 報告

これ實に眞理に渴し正義を慕ふものゝ集會なり故に會員の或者は南は山深き九州より來り北は鯨躍る北海の濱より來れり半禿の老人もあれば紅顔の少年もあり田舍の農夫もあれば小學の教員もあり其他學生あり官吏あり商人あり申込者百を超えて來りしものは八十餘名會は豫定の如く七月廿五日を以て緑陰深き角筈村の女子獨立學校内に開かれ八月三日を以て終りぬ講師は内村鑑三大島正健の兩氏にして午前八時より十時迄毎日二時間宛の講演あり題は宗教教育歴史の三面に渉り會員は皆熱心と沈默とを以て謹聽せりされど壇上の講演は本會目的の一部に過ぎず欅樹下に粗筵をのべて胡座詩吟を催せし時に利益は多く認められしなり相共に二錢饅頭を含みながら微笑と共に淡泊なる感慨を吐きし時に利益は多く認められしなり同飯菜を以て食事を講師と共に爲せし時に利益は多く認められしなり若しそれ毎夜團欒の坐談に至りては二時間宛の

懇話寧ろ東京獨立雜誌七十二冊を讀みしよりも益多くして且つ最愉快を感じたりし所予が斯くいふは一個人の私言に非ずして少くとも寄宿生たりし會員諸君一同の輿論なりとす

七月二十五日

午前八時開會、來會者七十六名女子獨立學校の校主なる前代議士加藤勝彌氏祈禱を捧げ内村講師は開會前感懷を據べてプロー、クリストエーパトリアの調和を說き次に大島講師札幌農學校の懷古談を語りて同校前教頭ウ井リアム、エス、クラーク氏の人物を賞揚し且つ札幌獨立教會の狀況をのべて同時代農學校の異彩を會員に紹介せり

午後一時すぎより愛吟會を庭内の西方緑陰の下に開く集るもの寄宿生十數名内村氏自著の「愛吟」を大誦しつゝ諄々乎として其解釋を下す本夜七時より坐談會を開く内村氏祈禱を捧げついで此室以外には校内いづこにも洋燈を點せざる規定に付爾今毎夜口と耳とに資りて宗教座談哲學座談を試みんと告げ自己の信仰に關する實歴談は數四の會員によりて談ぜられぬ

七月二十六日

午前八時開會來會者八十一名内村講師は「世を救ふの力」と題し哥林多前書十三章奇拔の註釋を試み世を救ふは一に愛の力にあるとを懇に說明して壇を下れり次に大島講師は「教育上の進守兩方面に就て」てふ題により諄々として論述せり

七月二十七日

來會者七十二名午前八時會員中の有志者六十六名校舍の南側に整例し講師を擁して撮影し了て水道淨水池の内部を一覽し九時十分講を開く内村講師前日につゞき哥林多前書十三章の何節によりてゼントルマンと日本の紳士、君子なるものとの區別を明にし古近の人物を引照してゼントルマンの資格を述ぶ

午後樹下の愛吟前日の如し、此日前日にまして炎威一層酷しきを以て閉會後十二社に水泳を試るもの多し

例の如く夜會を開く修身教授の至難を訴ふる教

育家あれば内村氏ペスタロッヂの實驗を以て之に答へ留岡幸助氏また來りて家庭學校組織の一斑を語り教師自ら勞働を以て兒童を率ゆるに非すんば百の修身談も其効なきを陳べられたり

七月二十八日

午前八時開會來會者七十五名内村講師クロンウエルの生涯を略述して渠の目的に及び渠は實にpractical mysticにして英國を直に實際的の基督王國に爲さんと企てたりしかもこれは渠に取り大失敗大悲劇の原因なりしと雖年々にクロンウエルの國家的理想が行はるゝことを論じ最後にクロウエル出ずんば我日本も救拯の術なきを喝破せり次に大島講師は國家と宗教との關係をのべたり

晩餐後愛吟朗讀前日の如し

本夜は我邦家族制度に對する感情を陳べ結局我々は耐忍して家長の命に服し唯徐ろに新道德を子女の腦中に注入して希望を未來に繫ぐべし云々を以て談を了りぬ

七月二十九日

午前八時開會來會者七十八名内村講師使徒パウロピレモンに贈れる書に丁寧なる解釋を施してパウロの面目を傳ふ

夜會は學生自活の問題なり内村氏先づアメリカ學生自活法の簡易にして其甚だ便宜なるを述べて日本學生自活法の研究に移るや車夫、新聞牛乳の配達、歐文校正、牛、豚、飼養等は會員の口よりならべ立られたれども結局現今の日本社會に於て學生の獨立して修學するの便法全くなしと云ふに歸着せり此焦眉の急問題は痛く會員の腦漿を刺激して論難切りに座間に沸騰し時鐘十一を報じてやうやく褥につきぬ

七月十日

午前八時開會來會者八十一名家庭學校長留岡幸助氏犯罪と宗教との關係より犯罪の原因を列擧して犯罪者をのみ責むるの酷なるを說き終りに犯罪問題の頗る興味ある學問なることを論しぬ次に内村講師は意志養成法を講じ意志は決して外部の修練によりて鞏固にせらるゝものに非ず殊に禪宗の座禪なるものは我々基督教徒の意志養

成法と霄壤の差あるものとなし意志を強にするはたゝ神に賴るにありと叫て終結せり

閉會後會員四十名許り内村講師に導かれ新井の藥師まで散策を試む　午後一時より寄宿舍生の希望により大島講師國語假名遣法の講義あり

七月三十一日

午前八時開會來會者七十八名内村講師は歷史研究の方法を講じ歷史研究法は先づ語學の力を養ふとなり主なる年代を暗記すると也而して最も大切なることは同情を人類に表することにありと論じて日本史家の專ら事實の攷證に傾けるを難じぬ次に大島講師は路可傳十三章を丁寧に解釋せり

夜會は内村講師の『自己の親友』なる出題あり談前日に比して甚だ振はず

八月一日

午前八時開會來會者七十三名内村講師ペンシルバニヤ州々立白痴院の院長ドクトル、クルリン氏の言行を談して日本人の偏狹を慨し吾曹は滿腔の同情を湛へて廣く人類を愛することを怠る可らずと注意し次に暫時休憩の後松村介石氏「學庸と論孟」と題して先づキリスト教の入來前に於て我人道を保護したるものは全く儒教なりし事を述べ次に四書冒頭の一節を順次に註釋して儒教の一斑を紹介しぬ

會員六十六名零時二十三分發の列車に投じ北豐島郡巢鴨村にある留岡氏の家庭學校に赴く氏は態々會員一同を招待せられたる也校内箒痕清らかにして寸塵を見ず樹木庭内を蔽ひて間々鞦韆あり又器械躰操の設けあり隨意庭上に座を占めて讃美歌を歌ひ留岡幸助田村直臣兩氏の演說ありて内村講師謝禮をのべ氷水茶菓卓上に運ばるや食ふて談じ飲んで笑ひ腹を膨らして鞦韆に乘るものあり繩を飛ぶものあり各自十二分の快を貪り若干の義捐金を投じ會員一同留岡君萬歲、家庭學校萬歲、夏期講談會萬歲、を稱呼して午後四時頃目白ステーションより汽車に投じて歸宿す

夜會は内村氏は「如何にして天職を得んか」の題を提出して如何なる人も各天職として恰好な

る才能を有す然れども之を知るは幾たびか失敗したるの後にあることを例證しそれより會員の質疑ありて終會せり

八月二日

午前八時開會來會者七十五名內村講師は過去の友を說き過去の友人は至る處にあり今其中の一人を紹介せんとてサミユエルジヨンソンを擧げて其言行の一斑を評述しジヨンソンに百年の知識と百年の進步とを加へたるものは即ちトマスカーライルにして次に出現すべき偉人はカーライルになほ百年の修養を加へたる人物ならざるべからずと結論し大島講師は馬太傳第五章の中四十三節以下を解釋せり

本夜は內村氏の命により各自三分間宛の夏期講談會に對する感情を告白す或ものは實際の內村大島先生はいたく雜誌上の內村大島先生と異なりきと談じ或るものは前後未曾有の夏期講談會なりと叫び或ものはかく正義の士と胸襟を披て快談を試みたるを喜び喝采を以て最終の夜を會終へたり

八月三日

午前八時開會來會者八十人留岡幸助氏は古來より日本人がdutyの念に薄くたゝAmbitionなる動機によりて事をなすが故に其極の大言壯語して僥倖を冀ふに至れりとて外國人と對照して之を說明し今の青年は神力を重ずると共によく人間の職分を重じ徐々として進行すべしと注意して壇を下りぬ次に

內村講師は個人の尊むべきは其靈魂にあり故に日本を救ふは只四千万の靈魂を救ふにあり而してこれ神に賴り自己に賴る諸君の努力すべき所なりと熱心に論述して第一回夏期講演會の講演はこゝに全く結了せり

角筈に於ける一日の銷夏錄

渡邊三造

朝曦輝々斜に東窓を射て　室內日影まばゆきにふと目を醒まし寐過ごしたりと　やをら身を立て起し　階を降りて井戸端に打ち出づれば　睡眼を擦すりつゝ手拭提げて出て來るもの　三々五々引きも切らず　曦場一時雜踏を極めぬ　さ

れど推讓の人々のみにて　誰れひとり先を爭ふ事を爲さず　己れ洗ひ終らば次ぎ人の爲めに水を汲み置き　やよ洗ひ給へなどゝ言うその親切の有樣は　げに若人に似合はぬ程やさしく見ゆ。嗽を濟まして寐室を淸むるの間に　鈴聲りん〳〵朝飯を報ず　食堂に抵り見れば　飯臺は廣く長方形に列らび　內村大島の兩先生既に已に相並んで共に其食卓にあり　一禮して食に就く。講談の始まるには未だ時刻もあればとて外國語研究の必要てふ書物を讀み居たるに　稍ありて鈴音開演を告ぐるにより　袴を穿ちて敎場に入れば　內村氏演壇に登りて祈禱を行はる　こは基督敎徒の會合には必ず先づ行ふ所の儀式なり　予輩信徒に非るものは　强ち之に隨喜する能はざれども　祈禱其ものが吾人の妄念を去り虛心平氣耳を講演一方に注がしむるの力あるは慥なる事實なり　氏は「世を救ふの力」なる演題を揭げ　新約聖書の哥林多前書十三章を牽き來りて本題の骨髓と爲し　救世の力は畢竟信と愛と望との三心に歸すれども　就中最も重んず可く最も貴ぶ可きは愛の情なり云々と　熱誠ある音調を以て奇警の語を放ちつゝ巧に人心を警醒せり　次に大島氏演壇に登る「精神進化と形體進化」なる演題を揭げ　生物の進化には精神進化と形躰進化とあり　最も精神的に進化せるものは人類にして　人の人たる特徵は實に之に存すと說き　更に敎育に於ても亦精神敎育と形式敎育との別あり　我國一般の敎育法は形式敎育の尤も甚しきものなり　是れ決して國家の慶事にあらずと慨嘆し　諄々として反覆詳論せられたり。講演終りければ各々寄宿室に戻り、演說の批評に時を移しぬ　午后に至れば炎熱赫灼一室に籠居し難し　偶々十二所の瀧え散步を勸むる者あり　衆擧て賛成す　十數名連れ達ちて校を出づ　步する事數町にして道は一簇の林中え入りぬ　但見る古松老杉亭々として高く聳え、雜樹其間に繁茂して蟬聲喧々たり、進むに從ひ瀑聲漿々と響き渡り　一陣の凉風颯々襲ひ來りていと心持よし　路傍の茶店に衣を脫ぎ捨て　急ぎ瀧坪え飛び込み　思ふが儘にう

たれ敲かれ　冷寒骨肉に徹するに至りて止む
瀧坪を昇りて彼方を眺めやれば　碧坦たる池あり　泳情動いて禁せず　即ち亦た池水に投じ
彼岸に泳ぎ達せば早や手足疲れて氣息喘々たり　曩の茶店に戻りて靜に憩へば　眠氣遽に催し來り神心恍惚殆んど溶けなむとするの快味を覺ゆ　暫ばし居眠りて后校に歸り見れば　庭前鬱蒼たる樹蔭のもと綠芝の上に　内村先生は五六の人々と圓坐し乍ら　愛吟集を繙きて朗らかに唱はるゝ最中にてありき　校内に入れば茲にも亦喨々たる音樂は敎場の彼方にて奏せられつゝありぬ　此際に於ける予が哀心の歡喜は筆舌の盡し得る所にあらざりき　予は實に無量の歎愷に充たされぬ　嗚呼如何に高尙優美なる慰み哉　正義を慕ひ眞理を求むる純潔の士寄り集ひ　愷色滿面相歌ひ相吟ずる所は　茲を措いて將た何つれの所に乎在る　天國は正に近きにあるらんと獨語けり晩餐終れば大廣間に於て談話會は始まりぬ　夜會には腦力を搾り熱血を昂むるが如き理論的談話は　可成僻くる事にせんとて　内村氏は己のが文學者としての經曆を談ぜらる　處世の參考として價値ある談話なりき　夫れより各自隨意の雜談に移つれば談辯湧くが如く　殆んど時の移つるを知らざりき。

嗚呼列座の士は前日まで一面の識なき人々なるに　今や一見舊知の如く、互に胸襟を開き　肝膽相照らして懇談する所以のものは　抑も何が故ぞ　斯かる多數の會合に罪なき穢れなき　安心なる愉快なる日暮しを爲し得る所以のものは何か故ぞ、是れ他なし　德義の支配する園躰、愛の流るゝ會合なれば也

北信侵入日記

内村生

夏とし云へば人士とも稱すべき者は必ず一度は都市の黃塵を避けねばならぬやうに思はれ居る今日、予輩とても人士の中間入りを爲したる以上は是非とも一度は夏期旅行を企てざるを得ず、去りとて獨立雜誌社解散の後を受け、殊に夏期講談會てふ大責任を負ひし後なれば入浴靜養などは思もよらず、「我に取りては世に在る事は戰ふ事なり」との或る羅馬人士の格言は余輩の生涯を述べしものにして、余輩に取りては夏なればとて必しも休むべきの時期にあらず、歳の首より歳の終りまで、母の胎内を出てより　チチユアの胎内即ち墓に降るまで余輩は戰鬪と度胸を定めし事なれば、講談會の疲勞の去るや否や、余輩は夏陣と意を決しぬ、友人の或る者は云へり、宜しく此時機を利用し、西の方京都に攻め入り、以て大に羽翼を攝河泉地方に張るべしと、余輩は知れり余輩は彼地に少くとも百名以上の味方を有し、余輩の鞋底の彼地を印する時は其處に壯快なる夏期講談會の第二次會を開くに至らん事を、然れども又或る友人は云へり、義務は先づより近きものより果さゞるべからず、信州の地余輩の出陣を促すこと久し、今の時に當て之を後にして彼を先にするは義と情とに於て大に缺くる處あり、今日は北すべき時にして西すべき時にあらずと、余輩は此議に伏し、忽ち余輩の作戰計畫を變更し、茲に信洲侵入とは決しぬ。

「アス一バンユク、ハタラク」、是れ出陣の前夜余輩が上田なる余輩の同志に送りし唯一の通知なりき、八月十四日家を出で、北走八十哩、二十八箇の碓氷の隧道を過ぎ、海面を拔く三千八十六呎てふ標を立てたる輕井澤驛にて晝餐し、淺間の南麓を馳せて小諸に至れば余輩の名を呼んで瀕りに余輩を求むる者あり、車窓より首を出して脫帽すれば是ぞ其地の友人が已に上田よりの報を得て此所に余輩を迎へしなりき、「余は友人に乏しからず」と獨り心に念じて喜びつゝ尙ほ一時間余の馳走を續くれば上田停車場には同志の一群余輩を待ちて余輩をして如何なる新婚旅行と雖も之に優るの快はなけんと思はしめたりき。

時は猛夏の最中、爾かも地方の中元に當り、人々多忙を極むるの際、人生問題攻究などとは思も依らず、然りとて其爲に來りし余輩の事なれば聽衆の尠きが爲めに余輩の目的を變更すべきに非ず、場所は上田城内の明倫堂、時は毎夜午後七時半より、聽講劵は一枚貳十錢、四日に渉

りて基督教的人生觀の一斑を講ぜんとなりき。第一回は八月十五日夜を以て開かれぬ、來り聽く者五十餘名、題は人心の開拓、先づ日本現時の經濟問題より說き起し、肥料問題に涉り、日本國の土壤の歲に腹せ行きつゝあるを論じ、富源の歲に月に減少しつゝあるを說き、終に人心の開拓は日本の富を增進するの唯一の途なるを述べ、以て經濟學と倫理學との關係を明にせんと努めたり、餘り面白き講演にはあらざりしも然かも聽衆に多少の實益を供せしならんと獨り自ら慰めたりき。

翌十六日は同志五名と共に馬車を驅つて千曲川の對岸鹽田鄕なる別所の溫泉に遊びたりき、途に桑葉の未だ成長を全ふせざるに夙く既に秋蠶の爲めに摘み取らるゝを見て、談昨夜の講演に及び、土壤の枯腹の止むを得ざるを語り、肥料問題の人心問題に次ぐの最大問題なるを語りつゝ午前十時目的の溫泉地に達しぬ、宿に投じて先づ喫煙の利害を攻究し煙草を利用して之を濫用すべからざるを語れば一行少しく不快の容貌を呈するが如し、時に其地の有志家倉澤運平氏の余輩を訪ね來るあり、氏は蠶種改良を以て有名なる人、然るに余輩に問ふに人心改良の大方針を以てしたれば余輩は何時の通り明白に余輩の確信を述べ「神、人、罪、救、」の四字を書して余輩の眞意の在る處を氏に示したりしに、氏はニコデモの如き半贊成を余輩に表し、厚禮を述べられて余輩を辭し去られぬ。

余輩は半日の睡眠を樓上に貪り、午後六時再び上田なる友人の家に歸り、定時再び明倫堂に入りて昨夜の講演を續けぬ。人心の開拓は智識注入を以て爲すべからず又儒敎の如き微弱なる敎義を以て行ひ得べきものにあらずして神の聖靈に依る人心の根本的改鑄に依らざるべからずとは此夜の講談の趣旨なりき、事勿論新說にあらず、然かも一顧の價ありし事ならんと信ず、殊に此夜祈禱と聖書の朗讀とを以て余の講義を始めし事は太た聽衆の注意を引けりとは余輩の後にて聞きし所なりき。

十七日　炎熱甚し、午前八時滊車に乘じ、隣村坂城村に知己兒玉女史を訪ふ、近隣の有志又相會し、靜談午後四時に至て歸る、勞多くして益尠きは公開演說なり、勞少くして快多きは座談なり、余は以後は重に途を後者に取らんと欲す。

夕に入て定刻開會、人心開拓用のダイナマイトは單に神の愛心なるを語る。

十八日　終日客に接し、又友を訪ふ、此日上田獨立苦樂部の組織成る、部員僅に五名、然れども彼等の活動力は平凡會員の五百に匹敵するを見たり、午後部員と共に撮影す、夜に入て最終の講演あり、題は羅馬書一章の十六節「我は福音を恥とせず」の一句に在りき、政治を語り、文學を論ずるの福音宣傳に比すれば愚極まるの業なるを說けり。

二十日　日曜日なり、上田メンヂスト敎會に於て說敎す、或る人は云へり、是れ余の平生の主義に反すと、然れども余は云へり、斯の如きは余の平生の主義とする所なりと、余は嘗て今の敎會なる者其物を憎みし事なし、余の力のあらん限り之を助け又或る時は之に助けらるゝは余の最も望む所なりとす、夜明倫堂に余の爲めに有志の慰勞會は開かれぬ、席上立川雲平氏の快活なる演說あり、一同滿足と感謝とを以て別る。

二十日　上田を辭して小諸に至る、舊友木村熊二氏と相會せんとして得ず、殘念なりき、午後二時より懷古園內湖月樓に於て演說す、來會者八十餘名、題は「吾人の採用する道德の種類」にして孝たり忠たるのみが必しも道德には非ずして、如何なる動機よりして孝たるべき乎、忠たるべき乎、人生は如何に觀すべきやに就て述べたり、而して文明的道德は先づ第一に國家的に非ずして個人的たるべき事、第二に上向的（貴族的）に非ずして下瞰的（平民的）たるべき事、第三に內顧的に非ずして遠望的たるべき事、第四に正義的に非ずして慈愛的たるべき事を述べたり、後茶話會あり、夜は有名なる政治家小山久之助氏の本家なる小山太郎氏の家に客たりき、氏は家近親の兒女十五六名を招き、彼等

をして余の女子教育に關する意見を聞かしむ、朝起きてより夜眠るまで口の閉る暇はなかりき、

二十一日　信州の夏陣は茲に終りて、朝八時小諸停車場を發し、碓氷を下り、關東平原を馳せて午後四時角筈の舊巣に歸りね、嗚呼信州、我は我が一生を彼の地の傳道に費やさんかな、角筈に在て僞善者と呼ばれ、泥棒と罵られ、惡人扱ひを受けんよりは、淺間山下に基督の福音を宣べ傳へんかな、是より　の注意は千曲川の岸に蒐まれり。

真情

悲む勿れ妹よ

吉野臥城

昨日海あれ松鳴りて
窓うつ風のものすごく
ふりそゝぎぬる雨はれて
今日の日かげのうすれゆく

二筋なびく白雲の
ちぎれて遠く消え去れば
しづまりかへる空青く
夕星西にきらめけり

笛のきこえし夕より
三年を空にあくがれて
戀になやめる女子は
家に今はの床にあり

花をふくみしくちびるの
くれなゐ匂ふ色あせて
星の如くにかゞやきし
瞳もいまは力なし

はぢを帶びたる耳たぶの
あたゝかなりし血は冷えて
艶なき髪のちりかゝる
おもわも痛く痩せしかな

高きおもひをおもひにて
緒琴にふれしその指の
あゝよしもなく顫きて
戀のしらべをこゝろみぬ

しらべはやがて薄命の
えにしの絲をひきむすび
たのしき春を夢みつゝ
胡蝶とまひぬ垣の外

花のかをりのかゞやける
日かげ短く暮れはてゝ
戀はむなしき紫陽花の
花より薄くあせにけり

幾度そたび少女氣の
そのあやまちを繰り返し
慈悲いと深きちゝ母に
わぶる聲さへうちしめる

清くたふとき師の君の
教訓をすてしやましさを
かき口説きては啜り泣く
涙あふれてせきあへず

今しも響く鐘の音に
細きかひなをさしのべて
何をか探る風情にて
かすかに姉の名を呼びぬ

「あゝ罪多き己が身の
生命もかくて消ゆべきか
罪になやみし己が身の
許さるべきか神の前」

「悲むなかれ妹よ」
みまもる姉はなくさめぬ
聖の書をとりあげて
その一節を口ずさみ

悲む勿れ妹よ

窓の小笹のさゝやきに
露はら〳〵とこぼるれば
忍める面わのさながらに
いけるが如く目を閉ぢぬ

歎ぎあまりし父はゝの
今ひとたびと抱けども
靈魂遠くとび去りて
殘るむくろに言葉なし

世に言葉なき亡骸の
土にかへりて花咲くも
神を慕ひしとこしへの
ねぶりの上に幸はあれ

研究

馬可福音書

英國 ゼー、シー、ライル博士著
日本 駒井權之助纂譯

纂譯者曰ふ本書は元家庭祈禱の時病者訪問の際并に聖書を獨修せんと欲する人を補助せんが爲に專ら平易を旨として著述せられたるものなれば讀者は本書に於て所謂學者的批評眼を以てせる註解を望む勿れ

馬可傳第一章一節より八節まで

第一章 これ神の子イエスキリストの福音の始なり 二 預言者の錄して視よ我なんぢの面前に我使を遣さん彼なんぢの前に其道を設くべし 三 野に呼べる人の聲あり云く主の道を備へ其徑すぢを直くせよと有が加く 四 ヨハネ野に於てバプテスマを施し罪の赦を得させんが爲に悔改のバプテスマを宣傳たり 五 ユダヤの全國およびエルサレムの人々かれに來りて各々その罪を告白しヨルダンといふ河にてバプテスマを受く 六 ヨハネは駱駝の毛衣を着、腰に皮帶をつかれ蝗蟲と野蜜を食へり 七 かれ宣べ傳へけるは我より勝れる者わが後に來らん我は屈みて其履の紐を解くにも足らず 八 我は水をもて爾曹にバプテスマを施しゝが彼は聖靈をもて爾曹にバプテスマを施すべし。

馬可の福音書は或る意味に於て他の三福音書と異なりたるものあり、此傳の中に

はイエスキリストの誕生並に其幼少時代の生涯に就て一として記す處なし、又比較的に其の言語論辯を記すもの僅少なり、即ちキリストの事業を錄したる所の四傳記の中にて此馬可傳は最も簡單なるものなり、然りと雖も其簡單なる故を以て馬可の福音を輕視すべきにあらず、蓋は此はイエスキリストに關はる事を簡潔明瞭に記したる所の貴重なる福音なればなり若し、主の言語に就て記す處僅かなりとせば主の行爲に就て記すもの實に饒なり、又此中には全く馬太、路加、約翰等の福音に落ちたる處の最も趣味ある歷史的事故を精密に記すもの屢々あり、約言すれば或人の妄りに主張するが如く此は馬太傳を略述したるものに非らずして、キリストの言語を記すよりも寧ろ其行爲に關する歷史を記さんが爲に靈的鼓吹に接したる一個獨立の證人がものしたる獨立の傳記なり、故に我等は之を讀むに須く尊敬の意を以てせざるべからず、蓋は此書たるや他書と齊しく所謂神の默示に接して著述せられたるものにして實に有益なるものなればなり。

第一、此數節の中にて先づイエスキリストの聖位に對する威嚴の明に發表せらるゝを認めざる可らず、即ち其最初の句に主を『神の子』として記せり、抑も此『神の子』と云ふ語はユダヤ人に對しては我等に對するよりも遙に多くの意味を有するもの

なり、此語は彼等に取りては主の神性を確かめるものに外ならざる也、即ちイエスは自ら眞の神にして神と齊しきものなりと云ふ發表なり、(約五ノ十八)此事實を福音の最も初めに掲げたるは實に能く其當を得たるものと謂ふべし、キリストの神性は基督敎の城とも壘とも稱ふべきものにして此處にキリストが十字架に於て爲し給へる償還の限りなき價値存し、又此處に主の罪人に對してなし給へる贖罪の死の格段なる功績存す、其死は吾等の如き凡人の死に非らずして萬物の上にありて世々讃美を得べきものゝ死なりしなり(羅九の五)、苦楚を受け給ひたる處のものは神の子なりし事を思へは何んぞ一人の人の苦楚が世の罪を贖ふに充分なりしことを怪むを要せん、主を信ずるものは宜しく目を醒して此敎理を遵奉せざるべからず、之れあらば信徒は盤石の上に立ち、之れなくんば砂上に立つが如く堅固なる地あるなし、我等の心は弱く我等の罪は多し、故に全く之を救ひて來らんとする怒より我等を助け出し得る處の贖主を要するや切なり、斯の如き贖主はキリストに於て初めて之を見る、而してキリストは大能の神なり(賽九ノ六)。

第二、福音の初めは聖經の成就たりし事を認めむ、バプテスマのヨハネは其宣敎の事業を預言者の錄せしが如く初めたりき、抑もイエスキリストの降世は前より知

られたる事にして決して不意に計畫せられたるものにあらず、創世記の最も初めに於て婦の裔は蛇の頭を碎くべきことを預言せられたり(創三ノ十五)、全舊約聖書中此同じことが絶へず末に至る程愈々明かに預言せられたるを見る、夫の屢々神の選民なりしイスラエル人の祖先に再三約束せられ又預言者等の繰返して預言したる所の救主贖主は他日必ず來るべしと云ふ約束是なり、即ち其誕生、性質、生涯、死更生等は凡て其降世より遙か前に預言せられ、而して贖罪の事は悉く其記されたる如く成就せられたり、此故に舊約聖書を讀むに當りて常に其中に何にかキリストに就て記されたる處のものを見出さんとするの望みを以てせさるべからず、若し舊約に於てモーセ、ダビデ、サムエル其他預言者等の外に何事も見出すこと能はざれば此聖經を讀んで益する處極めて尠なし、故に我等は須く舊約聖書を今より尚ほ一層密接に考究すべきなり、蓋は夫の我言詞(ことば)は決して廢(う)せずと云ひ給ひし主の語に聖書は我に就て證するものなりとあればなり(約五ノ三九)。

第三バプテスマのヨハネの宣教は一時ユダヤ國民の上に如何に大なる結果を生ぜしめしかを認めむ、記(しる)してユダヤの全國及びエルサレムの人々彼に來りてヨルダンと云ふ川にてバプテスマを受とあり、茲に記されたる此事實は大に人に看過

せらる、我等は「主の面の前に遣はされたる處の者」のことを忘れ、主の外に何事をも見ずと云ふ弊に蹈り易し、恰も太陽の赫々たるを見て明(あけ)の明星を忘るゝが如し、ヨハネの說教は爲に全ユダヤ人の注意を惹起し普ねくパレスチナを動搖せしめたることは明かなり、乃ユダヤ國民を其睡眠より醒し起し、主が現はるゝ時に爲し給ふべき事業の爲めに豫め準備したるものなり、主イエス自ら言ひ給はく、ヨハネは燃して光れる燈なり汝等好みて暫く其光を喜べりと、我等は茲に人望と云ふものは極めて當てにならざるものなることを認めざるべからず、若し暫く人望ある敎師が此世にありしとせばバプテスマのヨハネは蓋し其人なり、去れど其許(もと)に洗禮(バプテスマ)を受けんが爲に集り說敎を聞かんが爲に來れる處の群集の中にて眞に改心せるものは實に尠かりしなり、固より或ものはアンデレの如くヨハネに因りてキリストに導かれたるものあるは敢て疑べくもあらずと雖も、其群集の中大部分は自(す)の罪に死せしや明かなり、我等は聽衆を以て充滿したる敎會を見る時に常に此事を記臆せざるべからず、大なる集會は實に喜ぶべきことたるや明かなりと雖も、而も之と同時に此人々の中にて果して幾人遂に天國に達すべきやと云ふことを忘却すべからず、人望ある說敎者に耳を傾けて之を賞讃するは未だ全しと云ふ可らず、

又常に多くの人の集會する處即教會の如きにて神を拜むは是れ未だ改心の證據にあらず、我等は注意して直にキリストの聲を聞きて之に從はざるべからす。

畢りにバプテスマのヨハネの說教の中に如何に明瞭なる教理の存せしかを認めむ、彼はキリストを尊敬して我より優れるもの我後に來らんと言ひ、又聖靈に就ては明に彼は聖靈を以て汝等にバプテスマを施すべしと云へり、此眞理は之より前に如何なる人も斯の如く明に言ひ表したるものある事なし、現今の基督教全體に於て之に勝りて緊要なる眞理は他に之を見出すこと能はず、福音を傳ふる所の忠實なる教師の正に爲すべき重なる事は其民の前に充分に主イエスを言ひ現はして以て其充滿たる恩寵及び其救拯の力を示すにあり、之に次て爲すべきことは聖靈の働きを示し其恩寵により再び生れ心のバプテスマを受くることの必要を示すにあり、此二大眞理は實に常にバプテスマのヨハネの唇頭にありたるものゝ如し、ヨハネの如き教師の尙一層多くありしならば教會並に世の爲に幸なりしならん、今之を讀むに當りて我等はヨハネの宣べ傳へたる所の此眞理を實驗上如何なる程度まで知れるやを自ら中に顧みざるべからず、此等はキリストに就て如何に考ふるやキリストの必要を感じて安心立命を得るが爲に其許に逃れ行きしや、

キリストは我等の心の王にして靈魂の主なるや、聖靈に就ては如何に考ふるや、聖靈は我等の心の中に働きて之を新にし之を變へ給ひしや、我等をして神性に與かり得るものとなし給ひしや、我等の生死は俱に繫りて此問に對して我等の與ふる答の如何にあり、夫れキリストの靈なきものはキリストに屬かざるものなればなり(羅八ノ九)。

實驗

天職論

飯泉生

生を稟けて人間たり。而して自ら欺くも且つその名に走り他を擠すも尚ほその利を漁し他の後塵を仰きて營々拘々たる者幾年、多年の肉懷得て稍やく達し少しく膏粱に飽き空名に醉ふか醉はさるに身は疾やく白玉樓上の人となる。果して是れ人生の歸趣か、人生若し人間に屬するものたらばそれ或は然らん、然れとも保羅は道破しぬ云く、我儕のうち己の爲に生きおのれの爲に死ぬる者なし蓋われら生るも主の爲にいき死ぬるも主の爲に死ぬこの故に或は生きあるひは死ぬるも我儕はみな主のものなれば也と、然り人生は既に人間個々銘々の物にあらずして神の有に屬す。故に吾人々間は自己の都合の爲に生れ來らんとするも能はず自己の都合の爲に死して往かんとするも得じ。然らば世にその存在を許さるゝの間肉の事を逐ふの非にして神の情を濟すの是なるや論なきなり、乃ち神は實に吾人々間をして神の情を濟さしめんが爲に個々異なる資質と性情とを賦與せられき。而して

斯の天賦の資性に適應してそこより流れ出る力の顯はるゝもの即ち是れその天職也。吾人の生涯は即ち斯の天職を捉へ以て神の光榮を顯揚すべきか爲め特に神より托せられたるものにあらずや。非耶。

人眞にその天職を捉へて之に從ふは寧ろ彼の天分にして殆とその道樂に屬す。故に之を遂行するは敢て他より促され命ぜられて他動的に然るにあらず。又義理に驅られて從ふにあらず、飽までも自動的也。されば縱しそこに幾多の妨礙百出するも之が爲め遂に手を拱して止むこと能はざる也。而して彼の之を爲すは必ずしも之をその生計に資せんとするにあらず亦由りて以てその名を釣らんが爲めに然るにあらずして動機は無意識ながらも深くその天賦の資性に因す。但資質は到底渝ふること能はさるも性情は外界の境遇と內部の覺悟の如何に由りて之を化し得るを以て若し只一に外化を受けたる性情の趁ふ所に任するときは動もすれば唯厘に自家の肉懷を滿たすに過きざるものを指して天賦なりと誤認するに至るを免れず。故に天賦は之を遂行するに方り一種の快感を覺ゆると共もに衷心の滿足なかるへからず。若し之を爲せば名を博し利を漁するに便なりといふが如き利害得喪より打算したるものゝ如きは或は一種の肉的快感なきにあらずと雖とも一

黙衷心の滿足なくその云爲すべて他動的働作たるに過きさるのみならず若しその爲す所に失敗を招き蹉跌を被むることあれば失望落膽して殆と措く所を知らさるものその常なり。然れとも眞に天職を捉へて之に從ふものゝ如きは事の成敗は其問ふ所にあらず適くとして衷心の安慰あり。衷心に斯の道的滿足あれば既にその他を顧みるに足らず、眼中應さに世の毀譽なく又得喪なくその許さるゝ限りに横行濶歩して殆と無人の境を往くが如きの概なかるべからず。

若し夫れ時勢吾より進むか吾時代に拔くこと遠きか若くは時情の如何に由り或はその名の遂に世に知られさるのみならず、窮乏動もすればその身を襲ふもあらん。然れとも是れ天職を行ふ者の顧慮する所にあらす、何となれば吾人の天職を行ふは是れ人の事を爲すにあらずして洵に神の情を濟すものなればその世に在りて之を濟して往くに要する資料はその有形と無形を問はず之を與ふるに吝ならざるの神儼として照覽し給へばなり。若し時情非にして之を遂行するに可ならされば縱しその規模を縮小して外界の事情の許す限りを度とし窮屈を忍ひながらも尙ほその範圍に於て之を行へは世は亦思ひの外に餘裕あり餓死せしむるまでに酷薄ならさるを發見すべし。且つ夫れ生計の窮乏に陷り累をその天職の遂行に

及ぼすが如きは或は時情の非なるものその遠因たるべしと雖とも亦世の滔々たる流俗と同もに不覺不諦の裡に生活の虛飾贅澤に陷ることとその近因となるなきを保せんや。而も生計の上に質を主とし文を斥け尙忍ひ尙耐えその出來得る限りを爲すも遂に力を出すの餘地なくんば眞に是れ命の窮するところ亦神の旨たるに諦めずんばあらずと雖とも之を時情に考へ境遇に顧み工夫し鹽梅し而してその法を講し策を案せば亦その天職を遂行するの餘地なしとせず。何を苦しみてか輕々時情の非なるに託し敢て神の使命を棄てゝ心にもなきの地にその身を置き慣れも附かぬ業に從ひ營々として利名の奴となるを須ゐんや。而してその逼迫する生計問題を解釋せんとしてその天職を擲ち他に移らんとする者の意や殊勝にもその當初は若し生計に餘裕あるを得ば復その天職に還るべしと期するが如し。然れとも是れ未た眞に且強く自家の天職を捉へさるものにあらされば天職に不忠なる者の愚圖のみ。人々個々みな數百歲に亘るの長壽あるものたるを得ば斯くの如く悠漫の裡にも或は多少天職の遂行を庶幾し難きにあらさるべしと雖とも七十古來稀なるの短生涯に資して斯の緩漫の計を爲す、今夜なんぢが靈魂とらるゝことあらは如何、二兎を逐ふ者遂に一兎且つ獲ること能はさるに終るや固より

正にその所、否らずんば漸やく生計の餘裕あるに甘心して意氣地なくも疾やく一代の志を忘却し一生他の後塵を仰きて碌々たるもの滔々多くは然り。若し斯の如く拘々として一生を醉夢の裡に過ぐ或は咎めなしとするも然らんには神が吾人を世に送りたるの聖趣は遂に之を解し得さるに至るを奈何せん。

世に薄志の徒あり、朦朧ながらも自家の賦質に察し以て自家の天職を了するに拘らず、若し之に從ふときは窮乏動もすれば襲來し易く肉懷をして常に索然たらしむべきに怖れ奮然起て之に從ふを爲さず天賦の資質を忽諸に付し去り別に生計に資し易きの地を採り、身をこゝに投して一生を齷齪の裡に送了す。不信仰無意氣腑甲斐なきの沙汰恐らくは之より大なるもの莫けん。或は唯社交の快を貪らんが爲め宗教界を去て政治界に入るあり又厘かに妻孥の飽暖を希ひ教育を辭して實業に往くもあるに視て吾人は果して食ふ爲に生きるか將た生きるが爲めに食ふかを疑ふもの一再にあらず。然れとも若し生きるは食ふ爲めに外ならされば吾人は即刻唯今此世を辭して去るも毫も憾みなきなり、但食ふは唯生きるが爲めの手段に過きずとせばその手段の爲めに目的を閑却し去るが如きは不義之より太甚しきは莫し。世の志ある者斷々乎としてその輕重去就を謬るなかれ。

同情

東京獨立雜誌廢刊するや、余輩に書を送て同情を寄せられし人士は百を以て算すべし、茲に其二三を掲けて同情者諸君に對する余輩の感謝を表す。

大阪より　内村生　記す。

謹啓、予は東京獨立雜誌の愛讀者也、更らに予は數年來先生の著書に依り裨益を蒙りつゝあるものなり、予は之に對して深く先生に謝す、予は此等を透して先生の爲人を想望し衷心より先生を敬す、予は先生の事業の成らんとを願ひ、先生の主義の多くの人に知られ行はれんとを望むものなり、予は先生の愛育せし獨立子の廢刊を見て痛惜に堪へず、予は先生に同情を表し、先生の捲土重來の日の近からんことを祈るもの也。

擱筆に臨み予は先生か國家の爲め切に自愛自重せられんとを望む艸々不一

七月十八日　イ、

〇〇より　〃、

先生幷御全家の御幸福を奉祈候、小妹未拜眉の榮を得ざるも御高名を敬慕する十有餘年、尤も小妹在京中〇〇氏が度々先生に紹介せんと申吳れ候も其意を果申ざるは殘念に堪ず候、去れと一昨年獨立雜誌御發刊相成しを聞き、同十一月より愛讀致候而已ならず諸友人にも勸め居り申候處、計らざりき本月五日を以て終刊とは失望の餘り同雜誌を手にするを欲せず、精神の落付くを待て拜讀せんと存じ居候處、宿痾なる腦症四五日前より起り休養中一昨日はとゞろく胸を抑へつゝ通讀致し候處、豫定說の御高論により て小妹が長年宗教上に於ての苦痛は此御名文によりて頓に取り去られ、大に悟る處有之申候、小妹は元來信仰上其他に於ても所謂教會々員諸氏と意見を異にし、牧師諸君の行爲も感服せざる事とて此社界よりは罪人視せられ居る事に候得ば、殆んと二年間教會員に加はらず、獨り我家

同情

に子女を合手に靜に神を拜し、基督の御惠みを蒙り居るものに候も、餘り多くの人々に誤解せらるゝの結果失望落膽自己をも疑ひ頗る苦痛に沈み居り候處一昨日後大に快復致候得ば不文も耻す一書を呈し感謝の意を奉表候匆々不一

七月廿七日　病床に認む

ヌ、　ヌ、

尙聖書之研究發刊の日千秋の想あるを御推察被下度奉願候

北海道より

拜呈今や身を置くに所なきの時に際し足下愈々健勝爲眞理奉慶賀候、却說足下御主幹の下に東京獨立雜誌を發刊せらるゝや、予は初號より愛讀せしものゝ一人にして、而かも同誌の着するや先づ讀了し終ふにあらざれば他事を爲さゞるものに有之候處、本年六月當局舍類燒のとあるや、爾來九層の繁忙を極めし爲め遂に愛讀をも顧るの暇なかりしに、此頃漸くにして少しく朝夕餘暇を得る樣相成候ひしかば滯りのものを逐次拜讀せしに、其第七十二號「終刊」に至るや予

は實に慈母愛子に別れしの感相生じ、爲めに手に執りしものゝ涙潸然之れを久ふせり、(或は女々しかりしか予は實に之れを知らざりしなり、)然れとも予は今や死者の年齡を數ふるの愚を學ばざるべし、請ふ足下よ自重自愛以て「聖書之研究」に於て再び此慈母愛子に會するの時を與へ玉へ、予は一日千秋の思して相待つものに有之候　早々拜具

八月十二日　ハ、　ナ、